いかにみる人麿が眼には櫻鯛

重頼の撰に係る犬子集は、寛永十年に刊行せられたのであるが、その編纂に際して、立圃と爭へるより、遂に、貞門を去ることとなつたのであるけれども、左樣な事がなかつたにした處で、主義の上で、重頼は貞徳と歩調を共にすることは出來ない譯になつてゐたのである。まして、重頼は、爲人孤峭、自ら信ずること極めて篤く、恭儉人に下ることの出來ぬたちであつたのである。宗因は、寛永九年、主家加藤氏の退轉するや、八代を去つて、洛に上り、伏見に住み、老俳重頼に謁して、俳諧を談じ、秘奥を叩いた。是れ實に、寛永十三年、彼三十二歳、正にその氣鋭の時代であつたのである。宗因は、貞徳よりも、寧ろ宗鑑守武の迹を繼述せんとの意氣を有して居つたことは、既に說いた通りであるが、それも恐らくは、重頼の影響ではないかと思ふのである。蓋し、重頼は、窮屈なる貞徳の俳諧に慊らず思つてゐた半面には、割合に自由なる守武宗鑑の俳風に私淑して居つたのである。彼は、寧ろ宗鑑の遺意を辿つて、斬新なる心の俳諧を立てんとしたので、その宗鑑に傾倒して居つたことは、犬子集の序文に、

（上略）是を犬子集と號け侍る。……しかるを、犬子集と云事、犬筑波をしたひて書たる故也。

といつて居るので、明かに知ることが出來る。然らば、宗因の新風も、原原本本、その源に溯れば、師風を祖述し、高調したものに外ならぬのである。宗因の句中、具象的に觀相として表はるゝ叙景的の句、或は、一種の抒情的趣味を帶びたる者、往々散見する。

草ぼうゝと霞む古城
鐵砲に雉のほろゝを打合せ
春の野かけに出る若もの」
暖な日なたに猫の打ねむり
春雨はるゝぬれ椽の上」
詠めせん數奇者ゆかしき花の跡

白梅一輪椿一輪」

野は若菜つみところほる頃

きて見さいなになけれども茶の庵」

在々所々もよき秋のころ

今日も踊り昨日も踊り催して」

霧ふかき出格子にたち門に立ち

引きよせ顔のみゆる三味線」

（西翁十百韻）

江戸はづれ磯に波たつむら鳥

御殿山より明ぼのゝ空」

ながめやる海邊の里の二階より

内蔵たてる住吉のすみ」

一つふんだる松の夜嵐

色をふくむ二三の糸の片時雨」

（談林十百韻）

菜の花や一もとさきし松のもと

白つゆや無分別なるおきどころ

風にのる川ぎりかろし高瀬船

屋根やしぐれ谷深うして耳遠し

秋はこの法師姿の夕かな

有明の油ぞ殘るほとゝぎす

蒼蠅やみそぎにすつる瓜の皮

世の中や蝶々とまれかくもあれ

朝ぎりに海より出づる海邊かな

碓屋唄酒屋々々の秋の聲

雪の松曾根も久しき名所哉

富士は雪三里すそのや春の景
舟は七里三里先にや夏の月

此等敍事に敍景に抒情に、何れも、その詩趣を描き得て、或は鮮麗、或は巧緻、或は雄大、或は枯淡、或は凄艶、餘程蕉風に接近して居る。淡雅の趣致其の壘を摩すといふも、溢美の言ならざるを見るのである。これらの句には、前に引ける支考の評は、當らないのである。天は默々としてものいはざれども、天時循環、東風至れば、堅氷解け、百芳開く。何等の詩的情味なく、徒に遊戯文字を弄するのみにては慊らざる氣分、無意識の間に動き、遂に此等の句を生むに至つたものであらうか。俳諧が、宗因に至つて、多少の藝術的價値を有するに至つたのは、蓋しこれが爲めである。しかしながら、東風既に至ると雖、春猶淺く、江南の一枝、わづかに綻びそめしのみ。宗因に於ては、その俳風、人事に對する滑稽氣分を、奔放なる調子を以て表現せんとするを主としたのであつて、從容として自然を味はんとする態度、未ださまで著しからず。宗因の發句、約三百五十章の中、情趣やゝ見るべきものは、前引の十餘章に過ぎず。此に由つて、之を觀れば、宗因の本領は、前者に在つて後者に在らず。即ち、その作品の題材となりし者は、主として人事、特に都會の事、別して都會的遊樂、即ち歌舞伎、淨瑠璃、小唄などであり、此等を寫すに當り、往々醜陋の弊に陷ることあり、それは、特にその門弟に於て甚しかつたのである。その末流は、宗因の放逸なる一面をのみ傳へた者が多かつたのであるが、また其間に、自ら彼によつて新しく開かれたる道の他の一面、即ち詩趣を描寫せんとする方面に注意するものが出た。鬼貫は、蓋し其人である。彼は重頼に從ひ、宗因につきて、俳諧を學び、其の藝術的價値ありて、而かも閑却せられたる方面を强調し、遂に獨自の俳境を拓くに至つたのである。

次に寫實といふ意味のまこと、即ち眞情流露といふ事も、古今時代より、歌道に於て說き盡されて居ることで、決して珍しいことではない。天眞の流露を尊ぶことは、即ち辭藻の粉飾を排するといふことになつて來る。此は、歌道に於て、懇々として論ぜられたにも

係らず、少しも實行せられなかつた。否、實行せられなかつたから、あれ程に說かれたのである。彫蟲の技は、貞門俳諧に於ては、既に病膏肓に入てしまつてゐたのである。彼は、屢〻古今集の序を本にしてかいたらしい文をのこして居るが、寫實といふことは、これから得た考へであることはいふまでもない。

更に、道德上の誠心誠意といふ意味のまことも、歌の方から來てゐることは、いふまでもない。貫之の新撰和歌序にも、

雖三誠假二名於綺靡之下一、然復取二義於敎誡之中一者也。

と述べて居る。和歌に敎誡の功ありとの說も亦尙しいものである。これが和歌の傳統的思想となつた。だが、そのまことを貴ぶといふ事が、果して何の爲めになるかといふことについては、衷心未だ安ぜざるところがあつたので、或は、佛道の意を以て和歌を說き（發心和歌集序悅目抄）、或は、歌道は佛道の修行の機緣となるものだと說き（沙石集）、俊成も天台を學んで、一心三觀を歌道の極致だと悟り、歌道佛道は同じものといふ住吉明神の示現を蒙つて安心したといひ、或は歌論を以て、佛法に喩へ、西行は、慈圓に敎へて、和歌を學べは眞言の大事も分るといつたり、或は、古今傳授の三箇の大事を三種の神器和歌三神或は三諦に擬したり、或は人丸赤人を陰陽に配し、人丸を彌陀如來の化身としたり、定家も西行も、住吉明神の示現に、歌道の外に別に佛道はなしと敎へられて悟るところがあつたなど、皆すべて、當時唯一の敎權たる佛道に合致するといふことで、始めてまことを歌ふ歌の價値を決定して居つた。鬼貫も、

祈禱の俳諧興行して、いひつらぬる所、句にいつはりおほきは、いかでか神慮にかなふべき。句毎にまことを辨へざる人の努々おもひ立べき事にあらず、もたいなきわざにぞ侍る。（獨言）

追善懷舊の俳諧も、まことをはこばさる時は、これも佛の道にそむき侍らむ。（同）

彼は、まことをうたふべきことを道破せるのみにて、未だその人生にいかなる關係ありやといふ事は、發明するに至らず、只管舊來の說を奉ずるのみであつた。この點、芭蕉に

比して幼稚なるを見るのである。芭蕉は、このまこと(風雅)をうたふことは、人の人たる所以、動物夷狄と異なる所以なりと論じて、この數百年以來、集訟紛々たりし問題に、最後の解決を與へたのである。然るに支考になると、風雅の極致は、五倫の人和そのもので あるといつて、芭蕉のいつた風雅以上に、俳諧に價値をもたせようとして、又俳諧に道德的意義を附加し、却つて芭蕉の說に比して、退歩の迹を示して居る。

C、まことゝ句との關係

余は、既に「まこと」の意義を明にし、その由て來るところを論じた。然らば、「まこと」が歌はれたる句は、如何なる趣ありやといふに、「まこと」の句は、一見したところは、「さのみをもしろき聞えもなうて、底深く匂ひあらん」といつて居る。大悟物狂にも、「發句も亦、目前の常を作らば、意味深うして、しかも匂あらん」といつてある。鬼貫のいはゆる「おもしろく作る」といふのは、貞門や談林の俳風であり、「底深く匂ひある」といふのは、鬼貫の唱道する俳風である。讀み來り、讀み去つて、嫋々たる餘韻を、言外に聽くべき者、それが彼の求めたところである。蓋し、只管に興味あらん事をのみ爭うた談林風が飽かれて、平淡の趣味が、自ら歡ばるべき時代に到達したのでは無からうか。

「底深く匂ひある」といふのは、芭蕉が說く所の、「ひゞき」といひ、「うつり」といひ、「匂」「位」といふものと契合する者ではないか。又曰、

まことを深くおもひ入なんをつよき句なりといふ(ひとりごと)

また「何の姿」の序に、「細くからび太くたくましくうつりゆく時々おの〳〵はいかいに戯れ」といつてゐる、その太くたくましくといふのは、これを指すのである。芭蕉は、か細くあはれげな中にしんみりしたところの趣を愛したのであるが、(所謂細味といふのがそれである)、鬼貫は亦太くたくましき趣をも好んだので、芭蕉よりは、やゝ趣味のひろいことを示して居る。

まことすくなかりしをよわき句といひ、まことを深くおもひ入なんをつよき句なりといふなるべしや。(獨言)

而して「まこと」には、古今なし。從つて、まことを案じ入つた句は、とこしへに存して、陳腐となることはない。徒に新奇を競ふものは、當座は珍しいが、やがてはあかれる時が來るけれども、まことの句に於ては、この事がないのである。故に曰、

新しく作りたる句は、やがて古くなるべし。又あたらしくもならぬをこそ能句とは、いひ侍るべくや。作意にのみかゝはりていふ句と、まことを深く案じ入て、一句のすがた詞にかゝはらぬとの差別なるべし。（同）

修しえて、まことの道を行はん人の句は、幾とせ經るとも、新古の差別はあらじ。（同）

蕉風に於ける不易の說は、鬼貫に於ても、既に道破せらて居るといつて宜いのである。

2.　句の形式（修辭）の論

目前の常と、をのづから心に浮ぶ所とが、俳諧の內容となるべきものである。內容は本であり、此が表現形式は末である。故に內容を離れて形式のある譯はない。ある內容を、いかに如實に、的確に、鮮明に、力强く表現するかといふ點に、技巧の價値があるのである。往々、內容に重きを置いて、技巧を輕く見る者と、技巧に重きを置いて、內容を輕く見る者とがある。が、何れに偏しても、穩健な考とはいはれぬ。作者に、創作的氣分が起り、これが、恰好の形式を取つて表現せられる時、始めて一つの藝術品となるのである。

故に、鬼貫は曰、

只心を深く入れて、姿とばにかゝはらぬこそこのましけれ。（同）

しかし乍ら、內容を、的確に表現すべき手段は技巧であるから、之を輕んずるのも誤である。故に曰、

まとを深くおもひ入て言のべたるも、詞よろしからざるはほいなくぞ侍る。（同）

されば、彼も、推敲を忘らなかつと見えて、七車に、

夕立やむしろまとひの都麥
麥つきやむしろまとひの俄雨

此の句いづれに定むべき哉先づ書付ヶ置く。

西行歌に賤の女がかきつれ麥をほしかねて夕まどひするこかの里人。

と出て居り、ひとりごとには、治定といふ事を說いて、

發句に動くといふ事侍り。たとへばつばなの句を、すみれの句にしていへば、又それにもなり、杜若の句を、あやめの句にして見れば、なるをこそ嫌ふことにて侍れ。餘はなぞらへて考ふべし。

ある內容と、之を最もよく表現すべき形式とが抱合して、始めて優秀なる藝術品が成立つ。曰、

心と詞とよく應じたらん句こそこのむ所には侍らめ、（同）

內容と形式との融合は、最も望ましい事であつて、彼が蟻道の句を推賞した語に、

その初音や、雪の曙や、心と詞と能く相叶うて、都鄙遠境の耳を巡り、貴賤頭を春きて、其の感こまやかに、味ふ事舌頭に箕形の業を成さしむ（蟻道一周忌に手向くる詞）

芭蕉も亦曰、

調はずんば、舌頭に千轉せよ（去來抄）。

これ洗錬と推敲の輕んずべからざることを說いたもので、芭蕉の句が、その句の出てる句集によつて、折々異同があるのも、幾度か改作を試みた爲であるらしい。芭蕉は、措辭が內容とよく調和して、曲折斡旋の妙を得たるを、栞と稱して、子弟に授けた。この點も、兩者その見解を同じうすといふべきである。芭蕉の俳諧發句が、語々緊密、句々遒勁、精煉一字を動かすべからざるものが多きを占めて居るのは、蓋しこれか爲めである。鬼貫に於ては、無道作に、いひ放したやうな句が、甚だ多く、駄句も相當ある。俳論に於て主張したことが實行せられてゐない。天才肌の俳人であつた彼は、李白一斗詩百篇といつたやうな人で、一氣呵成によみすてたものが多い、輕妙飄逸、自然に流出する趣があり、こゝに獨特の趣致はあるが、元輕白俗の謗は免れぬ。芭蕉の句の悲涼沈鬱の氣を帶び、彫心鏤骨の餘に成れるものに比して、天淵の差がある。

さて、修辭形式は、師について學ぶべしといつて、「句は師匠のかたちによく似せて仕習ふべし」と說き、談林の俳人連が、その修行を重んぜなかつたのを慨して、

俳諧の道は、あさきに似て深く、やすきに似てつたはりがたし。初心の時は、淺きよりふかきに入、至りて後は、深きよりあさきに出とか聞し。むかしは、人の心すなほにして、初中後を經しかど、今はその修行する人だにすくなく、心皆さきにはしりて、いつしか人もゆるさぬ上手にはなりけらし。

是は、當時の俳人の實狀であつたので、西鶴の織留に、

今時の點者といふを見れば、きのふまで、馬は生類になりまする。牛は闇に二句きらふかとたづね、はなひ草、口から四枚も覺えぬ者が、菓子袋に押すやうなる印判をこしらへ、軒號にびくりさせ、一句一錢を點取に讀めぬ所は、評書なしに付墨し、鹿のうちこしに紅葉鳥をしらず、有馬の湯は、水邊にある事も、鴟は俳諧やら、烏は連歌やら、何一とつ聞分ける事なし。

當時の談林宗匠が、既にこの爲體である。他の俳人達の修業も推して知るべしである。彼は、自分の經驗を述べて、「予は天性數奇で、此道にこゝろを盡す事、をよそ四十年にあまりて、行くにも座するにも、忘るゝ事なく、臥時は、まくらのほとりに硯を置て、寢さめだに外なし」といふ、熱心さであつたといつて居る。

修辭の形式の學習は、初步の事であるが、師匠の風を摸擬するに終つてはならぬ。摸擬に發して獨創に終らなければならぬのである。藝術品には、作者特有の感じと、特有なる表現とがあるべき筈である。之を個性といふ。鬼貫の所謂「鶯は鶯蛙は蛙と聞ゆる」やうにあるべきである。一通り修し得たる後は、「そのかたちをはなれて天性ひとり〳〵が得たる風儀を用る」るやうにありたいとて、各自が、それ〴〵獨創の俳風をたてることを主張してゐるところにも、濶達な元祿時代の思潮が表れてゐて面白い。この點でも、芭蕉に同じいので、芭蕉も、俳諧に古人なし（葛の松原、俳諧十論）といつてゐる。又曰く、

格に入て格を出ざる時は狹く、又格に入ざる時は邪路にはしる。格に入格を出ては

じめて自在をうべし云々（一葉集）

鬼貫は、重頼にも宗因にも學んだのであるが、やがて獨自の俳風をたてるやうになつたのである。されば、其の句に、如何に個性が表れて居るかが、問題であつて、技巧の如何は、即ち所謂上手下手は、大して重大なことではない。曰、

ひとりたつわが俳諧を觀ずれば
上手でもなし又下手にてもなし　（大悟物狂）

彼は、技巧を出でて、無技巧の境に入らんとした者であつて、これその自讃の歌である。

用語については、まづ、口語俗語を用ふべしといふことを說いた。曰、

人とわれと、常いふ詞を句につくれば、悉く俳諧なりと、辨へしらざる人は、付句の味ひをもしる事かたかるべし。（獨言）

口語は、何故用ふべきかといふに、

思ふに付所品々ありて句の姿は變るやうなれど、皆同じうつはものゝ中をめぐりて、心新しきは無し。世の常の俗言をもつて作れば、全く俳諧にして、而も其の古きを免るべし云々

と、禁足旅記に述べて居る。句の清新ならんことを欲してのことである。而して、一句としては、異形異體なるを排して、

ことやうの句を作りてそれを新しとおもふ人は、此道を深く尋ね見ざれば、遠き境に入りがたくや侍らん。（獨言）

これ全く、談林派の放埒なる句風に對する反動で、鬼面人を威す底の談林の異體を厭うていつたものと思ふ。但、彼の句には、頭韻や疊語口語（殊に會話調の）の類を多く用ゐてあつて、そこに談林を經過した形迹が明かに看取せられるけれども、それによつて、ある特色の情調が、寫し出されて居るから、ことさらに奇調を弄ばんとしたものでないことは、言を俟たぬところである。

次に、彼は、根本のまことには、古今の變はないけれども、其の表現形式には、變遷あ

ることを認めて居る。七車に曰、

抑、貞徳、立圃、重頼三老の風姿、世に流布するの後、梅翁出て是を變化す。其時古今をはなれざるの輩、嘲弄して放狂の體といへるを、ふるしと云てわらふ人すら、今の變化をにくむは、其ふるしとさしたる輩のたぐひに覺えずして、今己が心のなりたる事をしれ。

來いといふ時にはこいでおういおい（北條團水が許より愚者といふ題をこして句乞けるほどに）

誠に痛快な議論である。固陋なる守舊者流を笑ひ、古人に羈縛せられざる意氣を示して居る。だから、各自みな獨特の俳風を樹立すべしと說いたので、伊丹には、かゝる自由な氣風が横溢してゐたと見える。逸士傳に、三紀の條に、

師ニ松江重頼一、不レ學ニ其體裁一。別作ニ一家一。

といつてある。之を、芭蕉に比較して見ると、亦符節を會するの感がある。芭蕉は、一時流行の說を立てたのであるが、それとこれとは、同じことなのである。

要之、彼の俳論は、護見の高邁、抱負の卓絶、共に稀にみるところであつて、その誠說の如きは、蕉風のそれと全く一致するので、詩趣と寫實とを唱道した點は、よく時弊に適中して、周匝の論法、間然するところがない。鬼貫の俳論は、以上述べたところで、略〻盡きて居る。依て更に進んで、實際について、その句風を見たいと思ふのである。

三、鬼貫の句

1. 句の形式

A、用語

鬼貫の俳諧における用語の特色は、口語や俗語を多く使用して居る點に在る。中には、大阪地方の方言もある。

筆とらぬ人もあらうかけふの月

松風や四十すぎてもさわがしい
なんで秋のきたとも見えず心から
春の夜の枕嗅ぐやら目が腫れた

水無月廿五日讃州の人におくる餞別

とぶほたる國へいんだら雲の上

はいかい難波順禮の一番に
喰ておいきやくていかしませ五加食

ひさしく音信れざりける人のもとに、何となく物語しけるに、そこらまばらなりければ、

うぐひすに内藏賣つてなんといふ

二年の鏡をかほの花にせう

月あかき夜圓通法師にあひて

こぶりこや木摩の里ゆく餅ぶくろ

月次の發句を乞はれて

寄りそめて菊をいくへも重ねうぞ
をとどしのから鮭かうてやすいもの
まつ宵の頭巾や耳を明けて居る

臘月十二日伊駒某宅へ初めて行き所望

春近うわらひ初めたがわすらりよか

あくたにも散る氣はなれてまあ二十日
いざさらば酴醾漉のうで千鳥きこ

その中、會話の詞を、其儘句中に取り入れたる者もある。

「なんとけふの暑さは」と石の塵を吹

句全體が、會話の詞になつてゐるものもある。

「國々を秋になつたら見にまはれ」
「春の夜の枕嗅ぐやら目が腫れた」

太祇の句にも、句の中に、會話の詞を入れたものが多い。例へば、

「東風吹く」と語りもぞゆく主と從
「あなかま」と鳥の巣見せぬ庵主哉
十三夜「月はみるや」と隣から
玄關にて「おかさ」と申すしぐれかな
「な折りそ」と折りてくれけり園のうめ
「筏士よ足のとまらめ花ざかり」
「妾が家は江の西にあり」菰粽

鬼貫句選を編纂した程に、鬼貫に傾倒した彼のことであるから、恐らくは、鬼貫に摸したのであらう。

宗因に、既にこの種の句がある。

「螢こい」と呼ぶや豐前のこくらがり
「な折りそ」としかるに一枝の花の庭
「ともかくも申さば古しほととぎす」
ほととぎす「いかに鬼神もたしかにきけ」

故に、鬼貫もその影響をうけたのであらう。重頼も「……かいの」等いふ口語を用ゐて居ることは、既に說いた。

來山にも、同樣の作例が多い。

花さいて「死にともないが」命かな
「重たくと雪つけてこい若菜賣」
「精進すな」といはれし親の彼岸哉
飯蛸の「あはれやあれではてるけな」

憶自他

酒買ひに「あの子傘かせ」雪の暮

李天集

「是は」とは朝戸々々に雪の聲

「袷出せ」花さへ芥子のひとへなる

口語を頻りに用ゐてゐる點は、鬼貫の句に於ける、最も著しき特色であると共に、それが後の俳人に與へた影響は、隨分大きい。よつて、この事について聊か贅言を費してみたい。

口語を俳諧に用ゐることは、その由來頗る古いのである。鬼貫の句に、口語の多いといふことは、敢て斬新なりといふにも當らぬことではある。

蓋し、守武既に、

其折節にや有けん、周桂かたへこの道の式目いまだみず、みやこにはいかんと、大かたのむねたづねしかば、かゝる式目は、予こそさだべけれ。さだめよ。それを用べきの、ざれたる返事、くだりあはせ、さらは、このたひ心にまかせん、所にいひならはせる俗言、わたくしひれたるこゝろことは、一向はうほつ、うつゝなき事のみなれど、あまたのうちなれば、うすくこく打まぜけり。（守武千句）

といつて居るが、例へば、

蛇は人をのみ人は茶をのみ

いけにへのあたりにするやしろならん

くわんたいなりとけんくわ出にき

といふ位で、「諧俳とてみだりにし笑はせんとばかりは、さていかゞ。花實をそなへ、風流にして、しかも一句正しく、さてをかしくあらんやうに、世々の好士の教なり」といつて、その滑稽は、宗鑑程には大膽でなく、俗語といつても、餘り大して著しくはない。宗鑑も、略々同樣である。

廿日あまりは人音もせず
此程はだうか〳〵と思ひしに」

花のしたにも松虫の聲
口髭をちんちりゝんとひねりたて」

つく度ごとにしるはじくじく
山寺の鐘の撞木は生木にて」

やぶをくぐりて夜這をぞする
鳥の名のしととしめてや契るらん」

そばへ藥をさせるだゝれ目
いかばかり心にしみて思ふらん」

下つて、貞徳の時代になつても、俳諧に口語俗語(及び漢語)を用ゐるべきことを主張して、之を誹言といひ、俳諧を定義して「俳諧は、百韻ながら俳言にて賦する連歌なり」といつて居る。彼は、連歌と俳諧との本質を、用語の相違といふ點で、區別せんと試みたので、如何に口語(及び漢語)の使用といふことを重要視して居つたかゞ分る。彼の、この定義によつて知らるゝ如く、俳諧と連歌とは、俳諧は口語漢語を用ゐ、連歌は雅言、歌語を用ゐるといふ區別があるのみである。即ち、內容思想の上に於ては、何等の徑庭もないといふ事になるのである。果然、彼の俳諧は、內容上に新味を加へようとしたものではなかつた。却つて、守武宗鑑の俳諧の自由にして濶達なる氣象は失はれ、附味も連歌の古き體裁に倣ひ、理智に墮してしまつて、全く生氣なきものとなつて居る。

あまり暑さにかゞみこそすれ
まつすぐな夏野の草に日がさして」

家はつくれどやぶれやすさよ
番匠のはだ寒さうな麻衣」

一寸二寸かゝむ冬のよ

わらしべで灸こそおろせかんの前」

人間萬事いつはれる中

替らじとさらば誓紙を下されよ」

及ばぬ戀をするぞおかしき

二階へとよばひに行ははし引て」

しんだらば別の妻をばよびもせで」

ふぐりのあたりよくぞあらはん

よこねこそうみちが出てなほりけれ」

印をむすべる手こそくさけれ

不たしなみな高野聖の若衆すき」

あの宮でどう此宮でどう

若衆をたてんと祈る神々に」

雲の上にも湯やわかすらん

金銀でいつけたやうな月日星」

ほつこりと洗ふたやうな月の顏」

さうし一帖うせはてにけり

有さうにおもふ源氏の雲隱れ」

おもふまゝにはいはれざりけり

りんきする人の若衆に打ほれて」

貞門に於ける口語の使用は、喧しく論ぜられた程には用ゐられず、用ゐられても、恐る〳〵用ゐてゐるやうな趣があつた。

然るに、宗因に至つては、何等疑懼するところなく、躊躇するところなく、縱横無礙、大膽なる用法を示して、小心翼々の古風俳人を驚かしたのである。

立ちやすしこんな事なら百年も

花の時は腕に生疵絶えなんだ

是は俠者にかはるの作也猶再案あるべきよし後をきかず。

紀の玉河にて

大師の詠水の月かや手がさへられぬ

智仁勇の勇を題に得て

なんの其氣でしたものぞ花見酒

人の所望に

かくもあらうかの聲ばかりや宵の空

素玄が獨吟せしに

ぬきん出た其櫻屋の茂りかな

友人來山の句にも、前記の句の外に、

舊臘三日の五更夢想あらたなり幸の事にして鶏の旦の一句に祝す

蓬萊や升の中から山が出る

出ずとよいとかけは人を驚かす

題道成寺

花の闇わる銀もつて追かける

鳥啼て鐘は花よりとつとうへ

花ならば花野の花にわけがあろ

宗鑑以降、談林俳諧に至るまで、俗言平語を俳諧にとり入れることは、上來述べ來つたことで明かであるが、何故俗語を使用する樣になつたであらうか。殊に、平民的な俳諧、娯樂的な俳諧を、貴族的な歌道、嚴肅なる歌道に結びつけて、只管權威あらしめんと計つた貞德までが、平談平語を使用せんとしたのであらうか。此は、極めて矛盾せる問題の如く見えるが、解決は、甚だ簡單である。曰、たゞをかしからしめんが爲めである。

然らば、俗語の使用が、何故滑稽の感を起すか。といふに、一體、和歌は、三代集に於

て、歌に關するあらゆる法式が確立せられ、歌とさへいへば、內容は、花鳥風月、神祇釋教戀無常をよむべきもの、形式は、歌語を用ゐるべきものとなり、殊に平安朝の末期は幽玄なもの、實生活より離れた別天地の高雅なる道、神道佛教にも冥合すべき神聖なる道とせられて來て既に數百年を經過して、それが絕對の權威となつてゐたのである。何人も怪む所はなかつたのである。室町時代以降、その和歌と同樣に幽玄なもの、高雅なものとせられ、且つ內容も修辭も、概して之と同じかるべく認められてゐた連歌に、所謂俳諧の連歌が生じ、內容としては、歌らしからざる事柄（前引宗鑑の俳諧の例參見）修辭としては、歌詞ならざる俗語を使用したのである。內容修辭それ自身に、格別滑稽の分子なしとしても、一般に型にはまつた事柄を、型にはまつた詞でよむべきものとせられてゐるところに、卒然俗語を聞かせられ、卑俗なる材料を見せられる爲め、內容と形式とに矛盾を感じて滑稽に聞えるのである。まして、夜這、若衆、ふぐり、こがし、辨慶がつぶり、狐火、鑵子、蛸（宗鑑）などの歌らしからぬ卑俗な材料をとり、更に俗言を以て之を綴るのであるから、更に滑稽の感を益すのである。材料そのものが、滑稽味を帶びてゐても、用語が古體であれば、よくはそぐはず、人の笑を誘ふ力は、半減してしまふ。彼等が、好んで俗語を用ゐた所以は、こゝにある。

宗因は、更に之を擴張した迄である。即ち、古風、談林に於て、口語を用ゐたるは、口語俗語の卑俚平俗なるを利用して、ことさらに、かやうな卑俗なものを提出して、只管、をかしく興あらしめんと力めたのである。その場合、その口語を用ゐなければ、ある情趣なり、ある景地なりを、彷彿せしむることが出來ぬからといふ、內面的の切なる要求があつたからではない。故意に笑はせん爲めの、わざとらしき試みであつたのである。

然るに、鬼貫に至つては如何。彼は、頻りに口語を用ゐて居る。而して、彼が口語を用ゐるは、以て古きを免るゝが爲めだと稱しては居るが、鬼貫以前に、かくの如く、俗言使用の先蹤があるとすれば、格別古きを免るゝ所以でもなささうである。矢張り、古風談林の亞流かといふに、左樣ではないので、口語俗語使用の意味が、全く違ふのである。鬼貫は、

俗語を俗語として、卑俗なものとして、殊更に用ゐたのではない。その用ゐ方が、極めて自然で、且つ自由である。毫も無理がない。こゝが相違する點である。彼は、古風談林の俳風の、わざとらしさ、不自然さには、つくづく嫌になつてゐた。辭章の藻飾に汲々たる俳風に慊らなかつた。性靈の自然に流出するをよしとした彼は、横溢せる感興を、僞らず、飾らず、あるがまゝに、表現せんと試みた。それには、日常の俗語が、最も適當であると信じたのである。だから、彼が口語を用ゐてゐても、それは、必ずしも滑稽味を出さんとしてゞはないのである。胸裏の感興は、之を用ゐるに何等の反省をも、工夫をも要せぬ口語で、最もよく現れると考へたのである。

余は、記してこゝに及んだ時、ふと思ひ浮んだのは、小澤蘆庵の、たゞこと歌の說である。(むしろ、前章に於て說くべきことであるが、思ひつくまゝに、こゝでいふ) たゞことゝは、即ち、心を求めずして、思へる處を、詞を飾らずして詠ずるをいふ。蘆庵以爲らく、歌は、日本のおのづからなる道であるから、賢からんとも思はず、けだがゝらむとも思はず、面白からんとも、優しからんとも、珍しからむとも思はず、只思つたまゝを、わがいはるゝ語をもつて、理りの聞ゆるやうにいひ出づるが、歌なのである。すべて、求めいでたるうたは、自然を失つてゐていけない。といふのである。即ち、わがいひ得る詞を用ゐよといふのである。然らば、別に修業する必要はないかといふと、「歌はわが思へる心を述ぶ。我は聞えたりと思へど、聞えねば人に通ぜず。通ぜざれば、歌の用を爲さざるが故に、修行して、よく聞ゆべく詠み習ふなり」といつて修業の必要なる所以を述べて居る點は、鬼貫に似て居る。又曰、修行至りて、能く調はば、面白くなるべし。未練にて面白からずとも、他にわたりてよく聞えて、歌の用を爲さば、不足あるべからず。わが思へることを言ひ出づるは、內心より出づ、さるを面白かるべき一ふしを言はんと言ふは、人の未だ詠ぜざる心を求めて詠ぜよといふ教にたがへる事なし。其心即ち邪曲にて、自然の道に逆へり。是は心外に心を求むる也」といつて、面白からんことを求むるの非なるを論じ、修行至らば、ただことを連ねて、しかも自然に面白くなるといふことを說いて居る。この點も、

符節を合するが如く、一致して居るが、蘆菴のこの說は、眞淵一派の歌人が、佶倔聱牙なる古語を用ふるを旨とせる歌風に對して起つた反動とも見られる。蘆菴は、享保八年に生れ、享和元年に歿したので、彼の歌學に關する意見を吐露したる「ふるの中道」は寛政十二年に刊行せられた。鬼貫よりは、稍〻時代が後れて居る。鬼貫の俳論が、古風談林に對する反動として起れるに比して、縣門歌風の流弊を救はんとせるこの歌論は、それに甚だ近似してゐるので興味がある。

かゝる意味に於て、口語俗言を俳諧にとり入れたのは、鬼貫が、その先驅であるといつて宜からう。かくて、かゝる俳風は、永く大阪俳人の間に傳承せらるゝ事となつたのである。鬼貫のこの主張は、その反響が、かなり大きかつた。その主張に共鳴する者は、續々その傘下に集まつて來た。

鬼貫の後輩なる伊丹の俳人は、その風に倣ひ、百丸、三紀、青人、蟻道など、大分口語を用ゐてゐる。

詞書略す（前出）

私は　鸞　に　な　り　ぬ　呼　子　鳥　　百　丸

ならぬ〳〵といふものゝ誰も心は自慢でおりやろなあ　一切衆生

下拙儀は耳が聞ゆる老の鶯　　青　人

御所柿をこねり〳〵とゆでくれな　　三　紀

眠藏は入よと見しがあまぼし下された　　百　丸

檜　垣

落したか釣瓶はあれども西瓜はなし　　青　人

亂拍子皮をふみやつてすべりやるな　　蟻　道

柿　山　伏

嶌ならば身ぶるひせうが鳥おどし

石　橋

大西瓜何値段わづかに八分百よりはやすし　青人

今まるり

腰本や目でつかふて見う後の出替　百丸

關寺

大西瓜かたぎの杖にすがりてしは〳〵と

此句四ッ夕吟ずる事をしらぬ人はきれじあるまじ

せんじ物

あたご火や江戸鬼灯めせところてんものまるれ　青人

これらは、元祿五年の伊丹發句合に出てゐるので、その頃には、唯、口語を用ゐる丈けでなくて、かやうな異體をも生じてゐたことが分る、かやうな長い句を當時は、「長發句」と稱してゐたと見えて、白露の俳論に、百丸の句を例にひいて說明して居る。曰、

然れども發句には一體起りて放逸の句々專ら行はれしと也。

踊子に穴あらば珠數につないで後生願はんものを

これを世俗長發句といふ。

これは、元祿五年頃の模樣であるが、この運動に對して、蕉門の方で、共鳴せし重なるものには、先づ惟然がある。惟然は、前に說ける如く、磊落洒脫にして、その人となり鬼貫に似て居り、句風も輕洒なる一體がその特色であつた。芭蕉は、弟子の性質に應じて、それ〴〵その特長を發揮するやうに指導したので、「是は（作者により敎を異にするは）、作者の氣性と口質によりてなり、あしく心得る輩は迷ふべきすぢなり、同門の中にもこゝに迷ひをとる人多し」と去來がいつて居るが、（去來抄、下）惟然に對しても、その長所を發揮せしめんとして、その輕洒なる句風を推賞してゐたので、惟然も、大に自ら任ずるところがあつた。そして、氣先を以て、咄出すべしとか、俳諧は無分別なるに高みありと稱し、その一風が俳諧の全部であると信じ、去來などに對してさへ、「頃日師に昵近して略俳旨を得たり」と豪語して居つた。從つて、彼も亦口を衝いて出づる儘の俗言を多く用ゐた。す

べて、蕉門に於ては、俗言を用ゐることを嫌ふ譯でなく、用語には、總じて制限を置かぬことになつてゐて、支考も「ましてや、俳諧の地といふは、本より俗談平語にて」といつて居る。が、又其角が、雜談集に於て「句に入らぬ語あり」といつたやうに、談林派のやうに放埒ではない。芭蕉など漢文字より悟入した人だけに、寧ろ漢語などを多く用ゐて、句も緊つて居る。惟然も「藤の實」時代には、緊密な句法を用ゐてゐるので、許六も推賞して居る。芭蕉の在世中は、惟然の俳風も師風を守つて、甚しく放縱には流れなかつたが、芭蕉の歿後には、口語を、極端に澤山とり入れて、濫に陷るの弊さへも見え初めたのである。それは、芭蕉歿後、僅に三年程經過した元祿十年頃、既にその傾向があり、許六も之を非難して居る（贈落柿舍去來書）。

溫厚なる去來も、坊は迷へりといふべしといつて居る。其角も評して曰、

うめのはな赤いは〳〵あかいはな

此惟然坊が今の風大かた此類也。是等は、句とは見へず。先師此坊が誹諧導き給ふに、その秀でたる口質の所より進めて、磯際にざぶり〳〵と浪打て、或は、杉の木にすら〳〵と風の吹わたりなどいふを賞し給ふ。又誹諧は、氣先を以無分別となすべし。と宣又、此後いよ〳〵風體かろからんと宣ひけることを聞まよひ、我得手に引かけ、自分の集の歌仙に侍る妻呼雉子あくるが如くの雪の句などに評し給ひける句勢姿などといふことの物語どもはみな忘却せりとみえたり（柿晋問答）。

正德二年の千鳥掛に、

出羽にて

しとやかなことならはうか田打鶴

於三知足亭一

名所夏

涼まうか星崎とやらさて何處じや

などの句があり、又句集に

水さつと鳥はふわ〳〵ふうわ〳〵
水鳥やむかふの岸へつういつい
花もなうすこしの分がまだなんぼ

惟然と親交があり、惟然が鬼貫の居を訪れたのち、この句風の一致、句に對する見解の一致といふことが、大に與つて力あつたことと信ずる。惟然と人となりの大層よく似てゐる舍羅も亦その風に化せられ、元祿十四年に荒小田を編輯した時には、鬼貫及び伊丹俳人の句もとつて居るが、口語の句が大分見える。伊丹派と蕉門派とが、この句集では、融合しかけてゐるやうな模樣である。

鳥落人のかりにて

曇るほどなをたのもしや後の月　舍羅
ぬく〳〵と芝居見て居て冬の雲　月尋
土の香のしぐれて來るや藤江前　播摩千山
ひう〳〵と風は空ゆく冬ぼたん　佛兄
出られたそ春待顔でひよつかひよか　芙雀
節季候や臼こかし來て間がぬける　佛兄

墨染寺の歸るさに

こがらしに墨染の井は曇りけり　好長
榾の火の丸ふ成たりとがつたり　沙長
苗代やまことの人が立てゐる　其外
さういふて人は泣ねど涅槃かな　月尋
若草や瓦屋根にも生てゐる　備後塊成
鶯の花には來つゝをしだまり　舍羅
あたゝかな山や嵐を聞ながら
青柳や俵積たる舟かある　稚竹

二月やちよつちよと門が見たうなる　楓　翁
古袷牡丹見さうな形でなし　桃〻坊
かきつばたしぼむ所に又咲た　了　智

この荒小田にも入句して居る月尋には、「とてしも」といふ句集があり、之によれば、その句風の著しく口語化してゐることに驚かれる。余は、未だ一見したことはないが、晉風氏の紹介せられたところによると、四季、戀、雜の順序に、諸家の句を擧げ、猶、附合獨吟載せあり、卷末には、之白の跋があり、左の奥書もあるといふ。

撰　者　羅門回月尋
寄　人　無量坊之白
筆者外題　鳥落人惟然
同　序　田丸蘇竹
四季俳諧　辻柳門

これで本書の成立もよく分る。晉風氏の紹介せられた序を、其の儘拜借して、轉載してみる。

雨にうたれ、露にうるほし土こえて、その草この草の根はひろくはびこり、礙なくとどこほる事なし。なれかしな罪も報も、よしもあしきもないぞ。扨々只深くさし入たるよしにはなく、何のなくぞや。あゝ花はにほひ、月は影のといふ事ぞや。やう〳〵それは其實をいふ事のむまきを去りて、辛きをのがれ、なかの味を賦すといふ事ぞや。いゝや何の味のしや〳〵りもない。こと〳〵なふ。君子の交は、水の如し。名利他美の境を踏て〳〵ふみこえての分別、なを理外なり。吐て捨たら言葉のつね、德の府にあらずや。只邪は正をくつがへしやすく、正は邪をくだきがたし。雲の色、鳥の聲、日夜の變化、神佛の教戒、自他の悅愁、いふにいはるゝ、いはるゝ事はつきぬ。やれ是つきぬ。そのつきぬ言ならずや、情ならずや。

元祿十六歲次癸未初秋夜燈下求

甚だ難解な文章であるが、その意を忖度してみるに、雨露の惠に、いつとはなしに草木が根を張る樣に、句も自然であるべく、趣向を凝すとか、うまい事をいふとかいふ事なく、「吐て捨てたる」まゝのことばが、すぐ句になるやうにありたい。雲色鳥聲、晝夜の變化、神佛の敎戒、自他の悅愁、俳材は澤山あつて、うたふべき材料や、風情は、無盡藏であるといふのではなからうか。(いはるゝ事はつきぬ。やれ是つきぬのぬは、文語でなくて口語のぬの義ではなからうか)。月尋の句は、

春ともないやゝいひや今朝も雪
梅匂ひ葉は誰かまたふそれで薫る
よい人でなけれど梅にわせたやら
柳の糸どちらへかあれ見えわかぬ
若草の一寸のびてそれももう
白椿もはや赤いであらうかい
野に立る梅は以前も爰に何んの
はあよいぞ寒さを破る山櫻
ならの花既によの木は似ぬは扨
花をよう越てそつちで嵐々
春三ッ月さらざつはと失ふて
芥子の花法師が母はいつ散た
うぐひすの音をいまいれうそうも又
みる本で蚊はたゝくまい筈をつい
午　熱
けふらさへ蟬は凉しい樹のうへに
生玉南信法印竹莊にて

八月のやうな座敷ぞ蓮もあつて
草も人も一夕立のよかろふは
夕立のそれたをがらもくもれば
それ野菊あゝ白露の跡もちよつこ
むんちゝ月影ふむもあら笑止
切聲に松むし幾夜いゝよもう
菊に露をかばをかじやかをしやもしやは
むしの草のふたつながらかゝれふとて
をゝう菊白きも黄なもけふのゝ

九月十三夜

やれはよう逃よ山の端雲の端の
日影なら送ふに月はむかへる寒さゝ

冬となる雲も急にはは
鐘はこうんゝ雪はだら
ひつくかへ鼻をひからす炭は火に
八幡山淀の水鳥ゆらゝ
鐘が鳴る撞木がなるかとへど口なしのはな

此等は、口語に泥み、濫に陷れるもので、却つて奇倔なる調に逆もどりして、その異體なる、談林末流の句と撰ぶところない樣である。丁度、この頃は、許六が「あだ口をのみ嘶し」、蕉門の内に入て「世上の人を迷はす大賊」と惟然を罵れる元祿十年の頃より、更に七八年を經過した後のことであるが、老脚雪を分けて杜國を訪ひ、一笑の墓に哭し、忘恩の門人荷兮を尋ね、輕薄にして同門の排擠を受けたる路通をも忘れず、死に臨んで、親交を門人に遺囑するといふやうな芭蕉が、在世の間は、其角の羈氣を抑へ、支考の才氣を服し、この俳諧王國も太平を謳歌したのであつたけれども、その歿後は、闔門の子弟、各〻旗幟

を一方に立て、俳雄割據の世となつた。まして、元祿より寶永にかけての頃は、丈草、去來、知足、猿雖、李由、等躬、其角嵐雪等、蕉門の柱石たるべき老俳は、悉く凋落し盡し、蕉門の統制、潮く破綻を示すに至り、剛骨許六は、縱に鼻梁向天の論を吐き、俳魔支考は頻りに譎詭變幻の術を弄するのみであつた。さなきだに、放縱に流れやすき惟然等の句風は、玆に愈〻疎蕩放狂の弊に墮し了つたのである。ひとり惟然のみならず、千山、寒瓜、菰州、酒堂、諷竹、路通などみなさうであつた。元祿十六年の當座拂を見ると、

梅は梅で花の時なら猶あそぼ　惟然
梅が香はめつほうかいな夕闇も　冬月
どれやろに痛入たぞむめの花　千山
梅か香に何ンでも旅をしてくれふ　酒堂
痩こける身を浮立ん花さかり　舍羅
ない事よ桃のけふ程よい天氣　いせん
螢これよふとらまえぬ最ちかさ　いせん
前うしろ投やりさんぼあつさ哉　乙州
馳走した鶉めかさて小便かよ　寒瓜
まつし〳〵寢られぬさかい秋の風　丸水
なを秋ぞ竹のうねりのしなりしな　いせん
鮑ならば松茸ならば嘸やく〳〵

しかも惟然は、この俳風には、自ら信ずるところがあつたと見えて、當座拂の序にのべて曰、

百年の日數、わつかに只三萬六千、その間ある事無こと、いはずしてなとか、此當座拂は、其ためにして成れり。他なし、ひらきて味ひ、余して呑こめ。風鳥にもらして、啄をたゝかす事なかれ、ゆめ〳〵。(因に曰、この序には署名はしてないが、惟然だらうと思ふ)

大變な意氣込であつたことが分る。更に極端なのは、芝柏の句法である。

花の雲そりや〳〵〳〵

が、かやうに極端な俳句の口語化は、一時流行したのであるが、享保以後、俳諧が、無識無學の俗俳に弄ばるゝやうになつて、俗語が、愈〻用ゐらるゝこととなり、雅語は漸く減じ、全く俗化し了つたのである。但、その口語を頻りに用ゐたるは、惟然等の如く、よし誤つてゐるにしても思ふところあり信ずるところあつて用ゐたのではなかつた。雅語を解せざる爲め、不知不識、卑近に陷つたので、俗語の中、比較的古雅に近き者を選んだのであり、鬼貫や惟然の如く、俗中の俗語を用ゐたのではない。俗言平語は、俗なりとして却つて用ゐなかつたのである。そこに區別があるのである。ただ、蕪村の如きは然らず、蕪村は、その俗の俗なる俚言をとつて、自家藥籠中の者となし、驅使縱横、これによつて特別なる氣を表し、よくその功を收めて居る。蓋し、彼が理想とせる鬼貫に摸したのではあるまいか。鬼貫よりも、更に洗錬せられたる句風を示して居る。

蚊屋の内にほたる放してァ、藥や
去年より又さびしいぞ秋の暮
起きてるてもうねたといふ夜寒哉
木枯や鐘に小石をふきあてる
梅咲きぬどれがむめやらうめぢややら
出る枕を打たうとしたりや柳かな
酒を煮る家の女房ちよとほれた
杜若ぺたりと蔦のたれてける
化さうな傘かす寺の時雨哈

俚言を用ゐて俚に流れず、俗語を用ゐて俗に陷らず、俗言を用ゐんが爲めに用ゐたるに非ず、用ゐざるを得ずして用ゐたる者なるが故に、妥貼にして自然。一字を動かす能はざる趣がある。一種の滋味、脈々として浮動するを見るのである。蕪村は、俗語を用ふると

共に、純然たる漢語をも併せ採つたのであるが、俗語を主として用ゐたものに、一茶がある。その自在なる手法は、古今獨歩といつても宜からう。一茶の友人大江丸も往々用ゐてゐる。

一茶坊東へ歸るを
雁はまだおちついてゐるにおかへりか

月居俄に京へ上るに
さてはあの京の鶯がよぶかいの

これなどは鬼貫の口まねである。

なりひら清女などのことの葉を思ひて枕の草紙の趣にしたかふ
彦星よこれ牧方の馬やらう
ほと〻きす黑二羽重をいやがるか
ありや〳〵〳〵葉櫻になく閑子鳥

又こゝに拾ふ句
郭公そつちは海じや人がない
方山主人十三回忌
あゝ夢じや十三年もみぢか夜の

炎　帝
見わたせは柳をはじめ暑さうな
あきたつとおもふ心が秋かいの

これは、鬼貫の
そよりともせいで秋たつことかいの
より脫化したものであらう。

盆の月歌よまいでも氣がはらぬ
去るいんきよのへらず口

おらが角力轉んでくれたで夜が寢よし
はつ雁やほとゝぎすめはまたせをる
　大津繪藤のおやま
色かへぬ松とだかれに行きをるか
　小くろ式部殿本復の賀
本ふくのかほみせ玉へ手をうたう
湯婆又籠にうらみがかず〳〵御ざる
　かのえさるとしの歳暮に
能う生きた大事のとしを忘れやうか

これよりも、更に一茶は自由である。鬼貫によつて高調せられた俗語の使用は、一茶に至つて完成せられたといつても差支ない。一茶の句の、輕妙洒脫、飄逸の態あるは、その自在なる口語の使用に負ふ所が多い。もし漢語を用ゐたとしたら、とてもあれ程の效果は收め得なかつたことと思ふ。

閑人や蚊が出た〳〵とふれあるく
大菊や今度長崎からなどと
鷦鷯きよろ〳〵何ぞ落したか
雀の子そこのけ〳〵お馬が通る
ねがへりをするぞ脇よれきり〳〵す
やれうつな蠅が手をする足をする
うかれ猫どの面さげて又來たぞ
赤い月これは誰がのじや子ども達
朝やけが喜ばしいか蝸牛
嬉しいか垣の小竹も若盛
どれほどに面白いのか火取虫

並んだぞ豆粒ほどの蝸牛
初螢都の空はきたないぞ

融通無碍、暢々として毫も澁滯の迹を見ず、まことに古今獨歩である。しかるに天保時代に入るに及び、口語を驅使するの力もなくして、口語を用ゐ、俳諧の特色は平語を以て風月の用に供する點にありといひ（梅室隨筆）、故事古歌などによらず、上代語や漢語を使はずして風雅に遊ぶのが俳諧である（麥慰含隨筆）等と、陳腐乍らも議論だけは、立派であつたが、實際についてみると、膚淺平弱、見るべものは殆んどない。

鶯や二聲なけば見たくなる　梅室
けふからと思ふが秋のきたしるし　鳳朗
鶯の果報や何の木にゐても　寥松
蝶も來る筈よ庵は面白い　蕉雨
見ておいた梅を初日のついで哉　一具

澤山に見て置け月は稀なもの

蒼虬の門人梅通曰、

天保の俳諧は故事古歌の覺束なきをもとめず、殺伐兵器の類を遺はず、虛無の說を用ひず、枕詞のぬめりを去り、漢語の堅きをとるべからず（含利風語）

即ち句の內容材料として兵器、理想をよまず、形式としては、漢語、雅語、故事古歌を用ゐぬといふのである。だから勢、口語俗言を用ゐざるを得ぬのである。だが、實は、無學の輩であるから、雅言、古歌など用ゐたくても用ゐ得なかつたので、かゝる牽强の說を立てその非を掩はんとしたにすぎぬのである。その俗言を用ゐて、平淺纖弱に墮したる、固よりやむを得なかつたのである。

余は俗語についてあまり筆を費し過ぎたやうにもあるが、併し三百年の俳諧史上に少からぬ影響を與へたことを思へば、忽諸に附することも出來かねるので贅語を弄したのである。

俗語を使用することの多い半面には、古語、雅語、漢語を用ゐることの少ないのも、當然であらう。しかし、和歌に造詣のあつた丈けに、歌の方から來たと思はれる語の使ひざまは、稀に見受けられる。

二里いぬる門に立たつはぎの月　　鬼貫

たちたつは、萬葉から來たいひ方である。

十かへりの花やたゝせむ松の花

ひさにへん友とや君に契るらむ十かへりの松の花さくまで（新拾遺）

松が枝にかゝるよりはや十かへりの花とぞさける春の藤波（新後拾遺）

十かへりの花は歌によく用ひる。

未了語を用ゐた例は、隨分多い。

春たつやたれも人よりさきへおき

北へ出れば南へ出れば花のなんの

うつゝなの夜とは秋とは今ぞ嘸

しよば〳〵にふるなら月を月をとも

夕立やとなり在所は風ふいて

雲の峰なんぼ嵐の崩しても

雪路哉柴に狸を折そへて

京より伊丹へゆく

水無月や風にふかれに故郷へ

夏の日のうかれて水の底にさへ

夜もさぞなあけやすいとは僞と

なにおもふ八十八の親もつて

風がふく梅のつぼみはしつかりと

鶯が梅の小枝に糞をして

鶯のなけば何やらなつかしう
春の日や庭に雀の砂あびて
世の花や百の峠も九十から
富士の雪わが津の國のものなるが
それそこにおのれを梅に鳥とは
ゆく春の夜をねぬ顔の籬から

就中、にを以て結んだものが多い。例へば、

名月やわづかのやみを山のはに
一の洲に都の客を馬刀とりに
御所柿のさもあかくと木の枝に
月も雪も何か殘らふ花も筆に
けふの日を柳にやりて月端に

むかふぞや相生のやうに此秋も春に

併し、斯樣な未了語は、宗因に於ても已に先蹤がある。

きのふまで水にたてしが葛の葉の
やよ時雨紙子と申し足袋といひ

來山にも、その例がある。

秋立つやはじかみつけもすみきつて
添竹もないにけなけなこのきくの
玉椿柱も石になりかゝり
春雨やこたつの外へ足を出し
松の月枝にかけたりはづしたり

未了語の使用は宗因や來山の影響ではなからうか。

次に、ある語を、特異なる用語の下に、使つて居ることである。その一は、花といふ語

である。

叶へばぞ陽につぼめる霜の花
世の花や百の峠も九十から
水に其勢でこそ夏の花
鳴ちらせ杉のあらしに聲の花
雪よ〳〵きのふ忘れし年の花
ふところに花こそにほへ夏の雲
雪霜に程こそみゆれ心花
三つか一つこゝろ香し霜の花
順ふや普なき花も耳の奥
うつろふや陽の花に陰の花
月よ今日よ去年の命に花ぞさく

木も草も世界皆花月の花
豆をくうて豆の花とも眺めばや
世の花や餅の盛の人の聲
燈の花に春まつ菴かな
木がらしの底に花ゆく老の波

花といふについて、苔といふ語も妙な用る方をして居る。

惜まじなあすの苔となる年を

いづれも、至つて難解なる用法である。霜の花は、霜を花に喩へたものか。聲の花心花、燈の花は、美しい聲、美しい心、美しい燈光の義に用るたものであらうか。花をかやうに多種の意義に用るたのは珍しい。

次に、特異なる形容の語を用るてゐるといふことである。こゝで、特異なる形容語といふのは、語そのものとしては、別に奇なるところはないが、被修飾語に對して、奇異なる

對照をなすをいふのである。

うぐひすの青き音を鳴くこずゑ哉
鳥の巣に去年のいろ出す花の聲
只の夜の夢のまくらや月の晝
久かたや朝の夜るから空の菊
幾露と朝待つ菊の笑顔山
行く馬の跡に花なし菊の空
袖に玉七つのむつの鐘に露
梅が香や衆生にみちて軒の聲
とりのすにこぞのいろ出す花の聲
雲やにほふ海もさくらも富士の枝
人麿の雲へもちかし年の奥

白くても白き味なし眞桑瓜
雲横に去年のことしの花や空
しらがうき今朝の昔の春日かな
咲く花や年の下手なる遲ざくら
凌宵や蟬の團扇に日の相撲

右の中、人麿の雲といふのは、古今集の序に、「吉野山の櫻は人麿が目には、雲かとなむ覺えける」とあるより來たものであらう。白き味といふのは、芭蕉の、

那谷寺は奇石さま〳〵に古松植ならべて殊勝の土地なり。

石山の石より白しあきのかぜ

などと同じい用法である。猶、奇なるは、

年を產む松も地の角洞の鹿

次に、鬼貫の句に、頻繁に用ゐられてゐる語は又といふ詞である。

それは又それはさへづる鳥の聲
又も又花にちられてうつらゝ
花散て又しづかなり園城寺
又一つ花につれゆく命かな
どつちへぞ春も末ぢやに又ねる歟
闇の夜も又おもしろや水の星
夕立の又やいづくに下駄はかん
冬は又夏がましぢやといひにけり
哀れげもまたほめく夜の秋の風
冬もまた松の木もつてむかひけり
としひとつ又もかさねつ梅の花
きゝに出て又もや菊の舞の袖

B、句　法

こゝで句法といつて居るのは、言語の連續をさすのである。鬼貫の句には、宗因の句法の影響と思はれる點が多い。宗因の句風は、甲の觀念から、俄に乙の觀念に轉向する時、其の矛盾から生ずる滑稽の感を得ようといふのが、その覘ひどころである。が、それに最も都合のよいのは、掛詞を利用するといふことである。蓋し、一語にして、同時に異れる二義を含んで居つたからである。果然、宗因の句には、掛詞を以て趣向を立てたものが多い。貞門では、緣語を多く用ゐるのに對し、これは掛詞を以て、其修辭の基礎と爲せるは、蓋し理の當然であるのである。宗因の句の樣式を解剖してみると、大體次の如くなると思ふ。

一、成語を用ふるもの、

1. 歌　おもひいる奥ぞ聞ゆるかいろとなく
　　世の中よ道こそなけれおもひ入る山の奥にも鹿ぞなくなる（俊成）

きのふこそ峯に寂しき門の松
　冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ峯に寂しき（新古今六帖）
なにはづにさく夜の雨や梅のはな
　なにはづにさくやこの花ゆごもり今をはるべとさくやこの花（王仁）
ながむとて花にもいたし首の骨
　ながむとて花にもいたくなれぬればちる別れこそ悲しかりけれ（西行）
さる程に千々にものこそかなし佛
　月みれば千々にものこそかなしけれわがみ一つの秋にはあらねど（大江千里）

2. 詩

花やこれ春宵一刻古手形
　春宵一刻價千金。花有清香月有陰。（蘇東坡）
清水門や民のとどまるところ天
　邦畿千里、惟民所止（詩經、玄鳥）
河上や宮前の楊柳肥前の花
　酒幔高樓一百家。宮前楊柳寺前花。（王建、華清宮）
きくに聲の西南より秋鰯
　歐陽氏方夜讀書、聞有聲自西南來者。（歐陽永叔、秋聲賦）
里人のわたり候か橋の霜
　鷄聲茅店月。人跡板橋霜。（溫庭筠、商山早行）

3. 謠曲、狂言、

はつ花や急ぎ候ほどにこれはゝや　（田村）
ほとゝぎすいかに鬼神もたしかにきけ　（同）
あふけ〳〵いづくか玉地なら團扇　（海人の趣をとる）
飛入やかの海底の玉椿　（末廣がり）
盃や笠をさすなら玉あられ

二、掛詞を用ふるもの

すゞ風やふき出す天下一貫文　（吹、　）
梅の花とんでおごらぬ小宮哉　（飛、富）
花はちり寺はこんりうじぶん哉　（建立、金龍寺）
しれさんしよからき名もよし花の緣　（山椒　）
津の國のこやかた涼しむかひ舟　（昆陽、小屋形）

三、疊音疊語を用ふるもの

夏山や或は野にふし伏見船
江戸に於て見し露も露萩も萩
それは近江これや此月紀三井寺
是は扨さつてのやどのあられかな
あぶなしやひよら〳〵瓢簞春の駒
いもは〳〵まづ月をうる今宵かな
我もやがてまゐるぞかゝるぞ袖の露
いかな〳〵花も今宵の月一輪
友人や古きを以て月も月

四、名詞を竝列するもの

錦手や伊萬里の山の薄紅葉
酒一升九月九日つかひ菊
月よさのかげや大とも大神樂
書初や行年七十攝州の住
河上や宮前の楊柳肥前の花
今つくばや鎌倉宗鑑か犬ざくら

掛詞は、ある觀念の分裂反撥によつて生ずる滑稽を求めんが爲めに使用せられたのであ

る。成語を用ゐたのは、例へば、「さる程に千々にものこそかなし」といふ古歌を思ひ浮べて、秋の月を想起するところに、自ら「千々にものこそかなしけれ」といふ古歌を思ひ浮べて、秋の月を想起するところに、突如として佛を點出して、その聯想を、一瞬の間に破つて、讀者の豫期せざる方向に轉ぜしめるといふ滑稽感を得る爲めである。そこに著しい變化を生じ、俊爽にして輕儁なる趣が出て來る。體言を竝列するといふのは、これ亦、語路の圓滑、句勢の轉輾、自ら奔逸奔放の態を生ぜしむる所以である。この四種の修辭法は、何れも歸する所は、同じ効果をもつものであることが分る。

これらの句法、修辭が、鬼貫に於て、どの位影響して居るかといふに、此等の句法を全然襲用して居るのではない。

成語を利用したのはあるが、まづ歌の語をとつても、別に掛詞に利用してはゐない。此の點は、宗因のと違ふ。

（前略）狩野元信が書きたる人麿の像を床にかけて俳諧興行ありける。予れに發句せよと、乞ひけるほどに即時

明けやすの此のほのぼのや烏帽子顔

（ほのぼのと明石の浦の浦波に島がくれゆく船をしぞおもふ――人丸）

雲水やいしな礫の端五つ

（うなるこが氷の上をうちならす石な礫のころ〳〵の里――諏訪湖をよめる古歌）

風になびく煙も夏の雪見哉

（風になびく富士の煙の空に消えてゆくへもしらぬわが思ひ哉――西行）

夜を殘す寢ざめや夏の雪廬

（夜を殘すねざめに聞くぞ憐れなる夏野の鹿もかくやなくらむ――西行）

夜を殘す袖にまくらに夏の露

（此は、詞書に「西行の夏野の鹿の鳴音を今東行子に離れたる寢覺におもひより

て」とあり）

二里いぬる門にたちたつ芽子の月（前出）

只の夜の夢の枕や月の畫

（菅家御歌に、ながめずば夢の枕にすぎぬべし月のきかする時鳥かなとの自註がある）

夕立やむしろまとひの都麥

麥つきやむしろまとひの俄雨

この句いづれに定むべき哉、先づ書付け置く、西行歌に、賤の女がかきつれ麥をほしかねて夕まどひするこがの里人といふ自註がある）

古歌の趣をとつたものでは、

なんで秋の來たとも見えず心から

そよりともせいで秋たつことかいの

（秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる（古今集）から來たもの、二句とも。）

まつとならばいなばまた來む秋もやがて

（立別れいなばの山の峯に生ふるまつとしきかばいまかへりこむ（古今集）より出づ。）

月代やむかしの近き須磨の浦

これは別にこれといふ歌から思ひついたのではなさゝうであるが、歌の方でも名高い行平や源氏のことを、須磨の月に偲んでるるのではなからうかと思ふ。

次に俗謠から來たものでは、

鶉なく吉田通れば二階から

これは「吉田通れば二階からまねく。しかも鹿子の振袖がションガヘ」といふ俗謠によつたもの。（山家鳥虫歌、卷下）

踏んでは花をやぶりふまずしてはゆく道なし
　野の花や月夜うらめしやみならよかろ

これは、「月夜うたてや闇ならよかろ、待たぬ夜にきてかどにたつ」（山家鳥虫歌、卷上）によつたのである。

諺をとつたものには、

昔から穴もあかずよ秋の空

秋の空は、その清澄なるを愛して、誰も昔から仰ぎみるのであるが、それでもよく穴があかぬものだとの意で、「穴のあく程見る」との俗諺によつたのである。

諺をとれるは、宗因にも、その例がある。

なんでその氣でしたものぞ花見酒　宗因

諺に、「男は氣でしたもの」（毛吹草）といふ。又「男は氣でくへ」ともいふ。男子は氣象を以て世に處すべしといふ意。

詩の語をとつた者が一つある。

地にあらば薄や星のみだれ髪

いふ迄もなく、長恨歌の在地願作連理枝から出たのである。こんな趣向は、宗因に、

天にあらばひよこの羽根も星の妻

とある。それを逆にいつたのである。

地にあらば練木摺鉢猫の戀　大江丸
天にあらば比翼の鳥や竹夫人　蕪村

などみな同じ。鬼貫には、老萊子、王褒、閔子騫などを題にした句はあるが、漢詩漢語から想到したと思はれる樣なのは、あまりない。

禪語に摸したものが少しある。

空道和尙いかなるか是汝が
　俳眼と問はれしに即答

庭前に白く咲いたる椿かな

空道和尚とは、如何なる人か全く分らない。墨染寺の住持かとも思ふが、同寺には、斯様な名の住持はない様である。併しいづれ禪僧には違ひない。いかなるか是汝が俳眼といつて、禪の問答のやうに問はれたので、庭前の柏樹子の話といふ禪語の體裁で答へたのである。

嘯山評していふ。「世不ㇾ知ㇾ禪。然是端的機鋒、何減ニ柏樹子之話一。」と。猶、前に引用した宗旦七回忌の追善句やその詞書を見ても、餘程禪語がゝつたいひ方をしてあるのに氣づかれる。又、禪語に類した句もある。例へば、

ふぐと程ふぐとのやうなものはなし

人間に智惠ほどわるいものはなし

謠曲を材料にしたものには、

寄謠無常

目をさませ後しらぬよのもみぢ狩

これは、紅葉狩によつたもの。

子をたづぬる母の網もて花すくふをかきたる繪に讃せよといふ即時

鳶からす蛙が母も水かゞみ

これは、櫻川を本にしたもの。

謠曲の調子をとつたものでは、

白く候紅葉の外は奈良の町

ちらとのみ雪はうき世の花候なし

宗因には、この例は大分多いが、鬼貫のには乏しい。

尙、二つ三つあげてみると、

禰宜の傘さして片手に燈を提て行ける繪に

雨雲の影神々し傘の下

これは「蟻通」の畫賛であらう。「ひとりごと」によると、元祿十七年二月の始、或人の所にいつた時、床に貫之の像をかけてあつて、主人から發句を所望せられたのであるが、折からの小雨の中に、籬の梅の白く咲てゐたので

雨雲の梅を星とも畫ながら

とよんだ。之は「蟻通の諷をおもひ出し」ての吟であるといつてゐる。

冬枯や平等院の庭の面

中七下五は、賴政の中の句であるか、これは果してそれよりとつたのであるどうか斷言はできぬ。

更行や花は紙にも押すものを

これは、櫻川に「花はあくたになるものを」云々の句に似てゐるやうである。

又ひとつ花につれゆく命かな

これも櫻川の「花につれゆくあだしみは」から來てゐるものか。

よもつきじ草の翁を露拂

上五は、猛々にもでてゐる句である。

またむ月入相の鐘に花ぞちる

此は、歌からきたものか、又は道成寺などからきたものか。

掛詞も用られては居るが、宗因に比較すれば、數も少く、その用法も頗る淡白で、卒然として之に對すれば、殆んどそれと氣のつかぬ位な程度のものが多い。

黄葉山にて

梨の花ありとはなしの花香哉　（梨、無）

夕暮は鮎の腹みる川瀨かな　（脊、瀨）

雨ぞ降るねて橘のおきてもぞ　（橘、立）

としの瀨や都の世話も角田川　（角田川、濟）

わすれめや世にありのみの魂迎へ　（有、有の實）

旅　行

夏の日を事とも瀬田の水の色　（瀬田、爲）
どこ更る空のあてども雨の月　（雨、あらず）

これらは、芭蕉の

蛤のふたみにわかれゆく秋ぞ
かちならば杖つき坂を落馬かな

と同程度のもので、あまり目立たぬ。

疊語は、隨分多く使用せられて居る。同一語句を繰返すのにも種々あるが、

（イ）語の反覆

名詞　白妙のどこが空やら雪の空
後の月雨のふる時けふの月
今の心是こそ秋の秋の月

豆をくうて豆の花とも眺めばや
うつゝなやうつゝなの月のそでにく
朝も秋夕も秋の暑さ哉
六月や臼を干さうぞつき臼を
殘るこだつまだ山里はこだつ哉
からやうや月のその空水の月

代名詞梅をしる心もおのれ鼻もおのれ
花雪やそれを盡してそれをまつ

動詞　まけよまけ佛の種も彼岸から

孝玄にはじめてあうて

夏衣きたうくもかねぐぞ
はいかい難波巡禮の一番に

喰ておいきやくていかしませ五加食
八雲たつ京に秋たつふじにたつ
春雨のふるにもおもふおもはれう

高井立志餞別人むかうて笑ふ、わかれて思ふ。ゆくも百三十里、とどまるも百三十里

そちへふかばこちへふかば秋の風
雪に笑ひ雨にも矢ふ昔哉
ねよぞねよ夢のゆくへの年を又
さくからにみるからに花のちるからに

助詞

此露を待て寢たぞやおきたぞや

題黄昏

目に耳にあふがぬ風の香哉

昔やら今やらうつゝ秋の暮
秋風や窓に枕に須磨の卷
羽二重に降るやら松に竹に露
天照るや梅に椿に冬日和

感動詞物すごやあらおもしろや歸花

日よ月よ千代の轍の初ぐるま

更に複雜なのは、一句の中に二種の語を反覆したり、

雪で富士か富士にて雪か富士の雪

又は、同一の語を二つ又は三つ用ゐたり、二つ又は三つの對語を用ゐたりして居る。

雪に笑ひ雨にも笑ふ昔かな
君を月をまつ夜過來し春まつ夜

同じく、語の繰返しであるが、擬聲語が多い。それは惟然に似てゐる。

寢られぬやにが〳〵しくもなく千鳥
つくづくとものはじまるこたつ哉
ひう〳〵と風は空ゆく冬牡丹
來いといふ時には來いでおういおい
さわ〳〵と蓮うごかす池の龜
ひら〳〵と本の葉うごきて秋ぞたつ
しよぼ〳〵にふるなら月を月をとも
しみ〴〵と立てみにけりけふの月

反覆せぬ擬聲語もある。

によつぽりと秋の空なるふじの山

これなどは、妥貼確當、千古の絶唱と稱すべきである。疊音疊韻を用ゐて、調子を調へんとしたものには、

猪名野の古郷に春をむかへて
事はじめいくやいなのゝしらうつぼ
ほんのりとほのや元日なりにけり
六日八日中に七日のなづなかな
それをだにそなたも春を惜まずや
年ひとつ又もかさねつ梅の花

句の反覆は少ない。

初　雪

雪に〳〵そけんによもなうて戸をあけた
雪よ〳〵きのふわすれし年の花
油さし油さしつゝねぬ夜かな　（契不逢戀）

最後の句の如きは、繰返しの效果最も著しく、精錬一字を動かすべからざるもの、綺艶

にして悲凉、纏綿の情と嬌啼の態を寫し得て、寔に謝眺の詩を讀むやうな感があり、嘯山の評に、悲壯超然味無窮といへるは、尤もである。語句の繰返しは、聲調の流麗を求むることゝなるので、

心あての花で吉野で餘をば猶

の如き句が、佶倔を感ずべくして、しかも佶倔を覺えざるは、全く疊語の力に依つたのである。しかし、疊語や擬聲語を用ゐた古今の句例を通覽するに、それらは、大抵景致を敍する場合ならば狹小、事象を述べる場合ならば單純なる者が多いのである。

行秋をぶらりと帰の釣手かな　史邦
ゆら〳〵と薄に立つや鹿の角　吟江
こほ〳〵と湯婆こぼすや石落のもと　百明
池の星又はら〳〵としぐれかな　北枝
陽炎やほろ〳〵落つる岸の砂　土芳
暖になるや椿のぽつたぽつた　之道
麻刈りてかつぱり淋し門の外　召波
はら〳〵と蕣のゆれうつりけり　冥々

鬼貫の疊語を用ゐた句も亦、この例に洩れぬ。單純の句が多いといふよりも、皆單純な句と評する方が當つて居るやうに思ふ。蓋し、僅々十七音の詩形の中で、少くとも二音又は四音六音を費すことであるから、複雜なるべき景致、錯綜せる事象をよみこむ餘裕を失ふからである。芝柏などは、更に極端に走つてゐる。

名詞を竝擧して句を成せるものでは、

春風や三保の松原清見寺
神まつり大和子供や立田歌
あら青の柳の糸や水の流
木も草も世界皆花月の花

しらいとやいなおほせ鳥よぶこ鳥

神祇の春の發句所望に

花垣や雲の和光の八重ざくら

立圃のかきけるふたりの翁をいとけなき童のうつくしくうつしたるに予が心ばせを書くと聞えし程に此人のうつはもの方圓自在に輝なん猶百とせの後をことぶき侍りて

月花や龜鶴の白髪もみかどみ

最も極端なるは、

ほととぎす馬追船頭お乳の人

句法の様式は、かくの如く、大體宗因に似たところは多いが、其様式に伴へる滑稽の氣味は少く、平淡清雅の趣に富む。畢竟、宗因の句の形式を採つて、内容を換へたのである。

尙、鬼貫の句の特色として、今一つは、――下五の變化といふ點をあげたい。(下五の様式が種々雜多で、口語、未口語、疑問令合の語、副詞句のものなど。)

C、句　調

疊語疊音を多く用ゐて居る所は、よく談林調の痕跡を止めてゐる。從つて聲調の流麗といふ事は、著しい事であるが、中には往々奇倔なるものもないではない。が、概して平靜にして穩安、談林の末流に於けるが如き險怪なる奇調は、殆んど見ることが出來ぬ。

上五の六音なる者が五十八章。七音の者二章、八音のもの一章。

櫻さく頃鳥足二本馬四本　（七音）

寒からぬ姿夜なき城の花車　（八音）

初五で切れる句は殊に多く、約七百句の中、其の半にも達せんとして居る。宗因の句三百五十章の中、初五で切れる者は、百五十句に上る。

いかにみる人丸が目には櫻鯛　宗因

立ちやすしこんなことなら百年も

なにはの音津國飼の丑のとし
やら涼し富士は磯うつ波の音
やがてみよ棒くらはせむそばの花
あととはむ他力本願の花の友

まづ初五で切ると、いかにも齒切れよく響く。殊に「いかにみる」「やがてみよ」などゝいつて、一喝を與へて人を驚かすの勢を呈し、そこに俊爽の趣を爲し、奔放の態を生ずるのである。鬼貫も蓋しその句法を襲用せるものか。

中七の八音なる者十章。九音の者一章。

あす盈ちて翌缺ける月の今日こそな　（八音）
雪に〳〵そけんによもなうて戸を明た　（九音）

下五の六音なる者八章。七音の者一章。八音の者一章。

しら魚や目まで白魚目は黑魚　（六音）
愛宕火に稻妻光るどひやうし哉　（七音）
むかふぞや相手のやうに此秋も春に　（八音）

子規曰く、「終六言を三三調に用ゐたるは、蕪村の創意にやあらん」（俳人蕪村）。この說決して然らず。既に、鬼貫が試みて居るのである。

月も雪も何か殘ふ花も筆に
まつとならばいな又こむ秋もやがて
北へ出れば東へ出れば花のなんの

蕪村の方が、却つて鬼貫の手法をまねて居るのである。要之、鬼貫の句は、流暢諧和、混々として自然に流出する態がある。鬼貫曰、

口をひらけどみな句也（俳諧圓袋）

彼の理想たる、「只さら〳〵とよみ流してしかも其心深し」といふのに叶つてゐる。この點、惟然と趣を同じうして居る。奇倔なる談林調としては、「櫻さく頃」「まつとならば」の

句及び、

あゝ蕎麥ひとり茅屋の雨を臼にして

位なものである。句調、最も奇なる者は、

奥の海といふ盃に

花に月見をばいづくにおりやしらぬ

談林擬ひの長發句は、寧ろ彼の後輩が試みたことで、鬼貫に於ては見られぬのである。（前出）

D、文　法

下五を結ぶに、動詞、助動詞、形容詞等の、連體形を以てすることは、餘韻餘情を残すといふ効果があるので、屢々用ゐられる手法であるが、連用形で結ぶ事は珍しい。鬼貫の句には、この種のものが二三ある。

千鳥なくすまのあかしの舟にゆられ

大阪へ行きて東行興行に

草の花の水にまかせて根を控へ

春立つや誰れも人より先へおき

苗代や隱居へ行きて手をつかへ

宗因、來山に既に先蹤がある。（既出）又下五に係結の異例なものもある。

師弟のむすびせまほしくいはれし人に

花のない木による人ぞただならね

連體形で結んで然るべきところであるが、已然形で結んである。蕪村、太祇は、或は之を模したのでないかも知れぬが、之と同じやうな作例を殘して居る。それは、後章に於て述べるであらう。

2. 句の内容

鬼貫の高唱したまこと即ち詩趣を咏吟すべしとの説は、彼の俳諧觀の著しき特色であつ

て言語の緣を辿つた滑稽や、觀念の急激な轉向による滑稽などに興味を求めようとした、貞門談林の俳諧と異なるところであることは、上來縷說したところで盡きて居る。貞門談林の主觀的な俳風の反動として、この新風が興つたとみてよいのであるが、この點では、蕉門の俳諧と何等の逕庭もないのである。而して、同じく客觀界の事物であつても、花鳥風月の傳統的な詩材にのみ、注目したのではなくて、從來は、詩材に入らずとして顧みられざりし、卑近な、通俗なものに、觀察の眼をむけることになつた。

日南にも尻のすわらぬ猫の妻
春の日や庭に雀の砂あびて
永き日を遊び暮れたり大津馬
一の洲へ都の客と馬刀とりに
摺鉢の花ににぎはふ庵かな
野田村に蜆あへけり藤の頃

題　吳　猛

蚊をよけて親の鼾や時鳥
戀知らぬ女の粽不形なり
竹の子や雪隱にまで嵯峨の坊
殊勝なり牛の糞ふむ鉢たゝき

これは、丈草も、詩歌俳諧辯に於て述べて居る所で、和歌は、其樣體、たとへば雲の上人の、衣冠つやゝかに、帶笏けだかうして、轅の中にいまそかるが如し。……たま〳〵には、富士、淺間、須磨、明石の逆旅に、浦の苫屋の夕暮までは、ながめ盡しぬれど、さすがに蛸壺の底さし覗きて、あはれ知るにたよりなく、小鰕まじりに籠馬鳴く蜑の屋には、腰くかべき褥も見えず、まして野くれ山くれのはしゞ〳〵、片道、鹿道、猿すべりの邊は、名を聞くにも及ばず。これその位高く、官高きが故に、下に臨める風景、棄る物おほしといつつべし。……俳諧の

かたちたるや、蓑笠竹杖草鞋しめつけて、朝立したるがごとし。京田舎去嫌せず、一所にあなまとひせず、雪の市中に押され、陽炎の芝原にこけたり、あるは山寺の小料理になぐさみ、士亭に逗留をあかれたるも、一段の笑ひなるをや。月ほととぎすの曉を、木の根、岩ばなに寢覺めて、又見ぬ方に歩をすゝむ。はてかぎりなき津々浦々、薩摩潟、蝦夷が千鳥の門脊戸までも、さらばいへ、殘す物あるかは。これ吾道の廣みにして、我あそび所といふべし。（風俗文選、卷之九）

右の文中、蛸壺の底さしのぞきては、芭蕉の

蛸壺やはかなき夢を夏の月

小蝦まじり云々は、同じく芭蕉の

海士が家は小蝦にまじるいとどかな

の句をさしていふ。斯様な詩材論は、今日よりいへば、いはずもがなの、分りきつた事の様であるが、當時に於ては、斯様な説明をせなければならない位、一般が、まだ目ざめてゐなかつたのである。ひとりごとの下卷には四季の風物について、種々の面白い觀察の跡が記されてゐるが、同じく陳腐な材料をとつても、精緻なる觀察は、自ら清新なる趣味の發見となつて、甚だ目新しいものとなつてゐる。鬼貫時代としては、珍しいことである。

○季節候は、いつの世よりか初りけん、實春秋のものとは、見えぬかたちこそおかしけれ。手うちたゝきて、拍子よくそろひたるに、物などいそがしく荷ひて、庭通りたる人に、間ぬけのしたるもかたの腹いたき。

○煤拂ひは、人の顏みな、埃におほれて、誰とも更に見えわかねば、聲をすがたに呼かはすもおかし。又置所わすれて、日比たづぬれ共、見えざりし物の、出なんどしたるは、我物ながら拾ひたる心地ぞする。

○餅突は、家々に其日をたがへず、けふはあすはと、親しき人々行かはして、とり〳〵賑ふ中に、老たる女の例しり顏に、下知なんどしたる家は、物こもりてみゆ。又をさなき人の、柳が枝に餅むしりつけて、花をみるよろこびこそ、其むかし戀しくは

侍れ。

鬼貫以前の俳諧、發句にも、いろんな通俗なものを材料としては居つたけれども(既出)それは、それを提出することによつて、殊更なる笑を催さしめん爲めの方便にすぎなかつたのである。鬼貫に至つては、それを用ゐても、強ひて滑稽化せんとする態度は、著しくない。そればひとりごとに於ても、屢々戒めて居るところである。自然に對する趣味といふことは、平安朝以來、和歌の方面に說かれた事であるが、芭蕉が、花を吉野に覩、安積山に沼のありかを尋ねたなども、その傳統的の風月趣味に促されての事にすぎない。鬼貫の「そよりともせいで秋たつことかいの」なども、和歌から來た趣味の句である。それでも鬼貫は、談林の出で、過渡時代の人だけに、極く淡白ながらも、そこに輕い滑稽趣味が彷彿として表れて居る。

鶯が梅の小枝に糞をして
白魚や目まで白魚目は黑魚
春の夜の枕嗅ぐやら目が腫れた
猫信が妻におくれし悼
夜もさぞな明けやすいとは僞と
西吟興行
佗びぬれど毛虫は落ちぬ庵かな

右の鶯の句を、芭蕉の

鶯や餅に糞する緣の先

などに比較しても、大した差違はないやうに思ふ。又白魚のも、芭蕉の

白魚や黑き目をもる法の網

に比しても同樣である。「蛙」について、古來の人の作例に比較してみると、

手をついて歌申し上ぐる蛙哉　宗鑑
和歌に師匠なき鶯と蛙かな　貞徳

よみかねて鳴や蛙の歌ぶくろ　重頼
立わかれなくや蛙の歌あはせ
鶯と蛙のこゑやうたあはせ　親重
かいる子の生湯かぬるむ池の水　道的

宗因になると少しく新味を帶びて、

和歌の道になれもさし井出の蛙かな　宗因

しかし、相もかはらず、古今集の序に膠着して、その埒外に出てゐない。來山も同樣で、

蛙々土のけてみん歌の種　來山

などといつてゐる。鬼貫になると、

玉水にて

山吹は咲かで蛙は水の底
から井戸へとびそこなひし蛙哉

とて、古今序などから全く離れて居る。

更に、蕉風では、いふ迄もないこと乍ら、

古池や蛙とびこむ水の音　芭蕉
飛石を腹ほどぬらす蛙かな　秋帆
飛込んで脚ふみ伸す蛙かな　爲文
鳴き立てて入相きかぬ蛙かな　落梧
ふととんで後に居直る蛙かな　松下
御手洗の木の葉の中の蛙かな　好葉

從來、幾度となく詩材にとられてゐて、しかも閑却せられてゐたこの小動物の動靜が詳細に寫されてゐる。さすがに鬼貫のには、一脈の滑稽味をさへ帶びてゐる。

今一つ、郭公を例にとつてみるに、

うづききてねぶとになくやほととぎす　宗鑑

東寺にまかりて　貞徳

秘密するこゑや眞言郭公

本尊かけたかにとらるな時鳥　慶友

急雨や聲の典藥ほととぎす　重頼

郭公中はよしはらすゞめ哉　重勝

子規まつやら淀の水車　宗因

しのびの音もやれたいこ鉦郭公

おなじ雲井の時鳥

時鳥耳すり拂ふ峠かな　鬼貫

雲枕花の氣さむる時鳥

津の國の玉川しれず時鳥

傘のしるしに

此夏は幾たび聞かむ時鳥

鳥羽繩手を通りて

空に鳴くや水田の底の時鳥

江戸にて

あちらむく君もものいへ郭公

夜の後灯白しほととぎす

鬼貫だけの句をとつてみると、玉石混淆してゐて、すべてが佳什ともいへないが、以前の句と比較してみると、成程と頷かれる。兎に角、自然なり人事なりを、忠實に觀察し、詳細に描寫せんとするところは、充分看取せられる。鬼貫の七百餘句中、敍景句が約二百章敍事句が約八十章抒情句が約四百章ある。

人事なり自然なりに、詩趣を發見し、その詩趣を咏吟するといふことであるから、別に主觀的の言語文字が用ゐてなくても、一種の抒情的の氣分が、隱約の間に動いてゐるのも

がある。

油さし油さしつゝ寢ぬ夜かな

に閨怨の切なる感をあらはし、

木にも似ず扨も小さき榎の實かな

とて、小さき榎の實に驚きの心持を示し、

旅泊病

長き夜を疝氣ひねりて旅寢かな

旅泊

膝かしらつめたい木曾の寢覺かな

とて、行脚のわびしさを心もとながり、

おもしろさ急には見えぬ薄かな

といひ、

須磨の秋の風のしみたる帆莚かな

と吟じ、

戀のない身にもうれしや更衣

と打興じ、

骸骨のうへを粧うて花見かな

一誦、惆然として深省を發せしむるの慨がある。

たよりなや笠ぬぐ後の春の雨

と、郡山をたちいでて、その心もとなさをわびてゐる。禁足旅記の清見寺にいつた條に、

海原見やるところにのぞめば、心暢び又心弱くなれり。

といつて、感激し易い、詩人らしい心持を示してゐる。茫洋たる滄海に對し、滄海の一粟たるわが身の小なるを、つくづくと感じたといふのであらう。

主觀句でも、客觀句でも、平々淡々たるものばかりで、客觀的の敍述も、精細は精細で

あつても、只それをあるが儘に打眺め、有るが儘に寫してゐるのみで、その態度が、如何にも無關心である。その事象の裡に立ち入つて、更にそこにひそめる神秘の生命を尋ねんともせず、豐かな想像を以て想像化せようともせず、梅の小枝に糞する姿を、唯見まもつてゐるのである。人生にも、自然界の現象にも、何等の不思議なく、神秘なく、現在を樂みうる人なることを示して居る。一茶などは、大に違ふ。現在の境遇に慊らざりし彼は、一些事、一微物にさへ、その滿腔の不平や憤激の情を洩して居る。

ふるさとは蠅まで人をさしにけり

涼風のまがりくねつて來りけり

下谷一番の顏して更衣

我を見て苦い顏する蛙哉

我菴や蛙初手から老を鳴く

涼しい風も、涼しい風として嬉しい心持で寫されてをらず、ひとへを貫つても心から喜ぶことが出來ず、蛙を見ても、それが苦い顏してゐるやうにうつるのである。無心の風や蛙でさへ、猶かつ然り。況んや、美人の門涼を見ては、愈々穩かならず、

下駄ころりからり彼奴らが夕涼

といつて、虛心怛懷、あるがまゝにものを見ることが出來ないことを示してをるのである。そこに大なる差異がある。鬼貫等と正反對である。こゝに鬼貫の、太平の逸民らしい、洒落なる詩人らしいところが表れて居る。

鬼貫の句は、全體として、單純なる者、自然なる者が、殆ど全部を占めて居る。蓋し、眞率を尊び、平淡を喜び、自然に流出するの趣あるものを好むが故に外ならぬからなのである。從つて、作爲の迹あり、不自然なる者は少い。で、即興即景の句が多く、趣致の複雜な者、濃艶巧緻なる者など、すべて彫琢を加へ、意匠を凝した者は少い。主觀的でも、客觀句でも、皆この趣を有する。それで、千篇一律の誹は免れぬのである。俳材單純の極遂に無配合の句さへも出來て居る。

春の水ところ〴〵に見ゆるかな

しかし、これなどは成功した句である。春日登高の大觀を叙し得て、氣象雄渾、蓋し稀に見る佳什である。

しかし、同じ無配合の句でも、

それはまたそれはさへづる鳥の聲

などは、面白くない。其の弊、遂に平板に流れ、乾枯に墮した者もある。

風がふく梅のつぼみはしつかりと
六月や臼を干さうぞつき臼を
鹽尻はふじのやうなるものならん
しょろ〳〵とつねは流るゝ大井川

單純なのも惡くはないが、一歩を誤れば、平凡に陷り、無味となり易い。故に、嘯山も、集中「あるは無味なる」句のあることを認めて居る。從來の句弊を矯めんと欲して過ぎたる者である。奔馬の躓き易きが如く、餘り無雜作にいひ棄てゝ、用語の洗錬を忘れたのもある。從つて、何の事とも解しにくいのがある。嘯山も、「すべて集中にあるは解しがたき者もあることを認めて居る。例へば、

田　家

苗代や隱居へ行きて手をつかへ
初風や去年の目さますいねの花
松風や四十すぎてもさわがしい
どつちへぞ春も末ぢやに又ねる歟

これなど、誰が寢るのかはつきりせぬ。

目は横に鼻は竪なり春の花

孝行と題してはあるが分らぬ。横目縱鼻といふ語から思ひついた者か。

櫻さく頃鳥足二本馬四本

これなども、奇倔甚しい。

誰家の醤油むすぶ春の草

「むすぶ」といふ語の用法が、正確でないから、句意明晰を缺ぐ。

から井戸は水瓜にあはず月のみか

年をうむ松も地の角洞の鹿

鶯は山時鳥ばかりなり

嘯山も、こんな句には、「初心しばらく手もつけずありなむ」といつて居る。尤もである。全く手のつけやうもない。同じく單純な者の中に在つて、叙景句には稍〻複雜なものもある。稍面白い者をあげると、

卯の花や踊り崩れてほとゝぎす

淀川に姿おもたや水車

野の末やかりぎ畑をいづる月

飛ぶ鮎の底に雲ゆく流かな

草麥や雲雀が上るそれ下る

口語を用ゐて活動の狀をよくあらはしてゐる。

行水のすてどころなし虫の聲

冬はまた夏がましぢやといひにけり

この句は嘯山が「豪宕渾雄、百載之下、無下繼二遺響一者上」と評してはゐるが、一歩を誤れば、月並に墮する危い句である。行水の句を、嘯山は、極近二人意一亦自超然。と評して居る。

春風や三保の松原清見寺

行く水や竹に蟬なく相國寺

緊つた句である。蕪村そのまゝの句である。

すまの浦の風のしみたる帆莚か

老蒼にして沈鬱。

によつぽりと秋の空なるふじの山

初五妥貼。富峰の清秀と峥嶸とを叙して得て暢達、古今の絶唱といつて宜からう。嘯山の評に曰、渾雄、得二李青蓮之風骨一と。眞なる哉。

淋しさの急には見えぬ薄かな

嘯山曰、老蒼渾朴、尤大家之手段。

うたてやな櫻を見れば咲きにけり

油さし油さしつゝ寢ぬ夜哉

契不逢戀と題して居るが、嘯山の評に、悲壯超然、味無窮。予少時聞二之口碑一、未レ悉二鬼貫乎否一也。頃見二何姿集載二此篇一也、始識レ眞云とある。艶冶の態、凄凉の意、さながら描けるが如く、綿々の情、隱約の裡に生動するの感がある。

夕立の又やいづくに下駄はかむ

嘯山曰、諷蕩而不レ陷二諧談一。是此老之長技。惜未レ見二其全集一。雖レ然所レ錄數章、氣骨翩々、可レ與二來山一雁行上也。

木にも似ず扨も小さき榎の實哉

自笑曰、扨もと感じたることは、この一句の力也。

涼風や虛空に滿ちて松の聲

語勁句緊、字々千鈞の重味がある。何といふ勁拔なる表現であらう。松濤稜々、薫風颯々、滿目清涼の意、この十七言に横溢するの慨がある。獅子谷眺望と題してあるが、塵寰を離れた別乾坤の夏が、目睫の間に彷彿たるを感ずる。

やれ壺に澤瀉細く咲きにけり

枯淡にして婉雅。

要之、其句は、着想自然、詞章平明、而して其の調は輕々飄々、脫洒蕭散。當時に於て、踵を接するものは、蓋し稀であつたのである。芭蕉に比して考ふるに、彼は閑寂、此は蒼老、彼は平穩、此は磊塊、彼は淵雅、此は勁拔、彼は深沈、此は輕洒。しかも、その幽玄

なる點に於ては、符節を合するが如くである。彼は呼んで蕉風といひ、之は稱して伊丹風といふ。然らば、兩者は、兩々相持して、遂に軒輊するところ無きかといふに、決して然らず。鬼貫に於て惜むべきは、平板に流れ、無味に陷れる句多きこと即ちこれである。彼の俳論が、旨趣精嚴、光采奕々たりしにも似ず、此の弊あるは、誠に憾むべきである。併し蕉風すらも、享保の時代に入りては、幽玄なる叙景が平凡無味に流れて、その結果、反動として洒落風の起れるを思へば、これ亦止むを得ざることであつたのである。芭蕉の句、凡そ千餘章、その中佳章を以て目すべき者二百餘章、即ち五分の一に及ぶと、子規は評して居る。(獺祭書屋俳話)。鬼貫の七百餘句の中、最も佳章と思はるゝ者は、まづ二十分の一位なものであらう。しかも、芭蕉は、蕉風開眼の貞享三年より歿年に至る迄、即ち九年間に二百餘の佳什を得たのであるのに、鬼貫は、大悟せる貞享二年より歿年に至る迄、約五十三年といふ長日月を經過して居るのであるが、芭蕉程多數の名篇を得なかつた。まして、芭蕉の句は、多方面に亘り、幽玄、纖巧、華麗、奇拔、滑稽、自然、蘊雅、豪壯、勁拔の諸體、行くとして佳ならざるはない。(子規による)

明月や池をめぐりてよもすがら　(自　然)
袰へや齒にくひあてし海苔の砂　(幽　玄)
落ちざまに水こぼしけり花椿　(纖　巧)
行末はたが肌ふれん紅の花　(華　麗)
飲みあけて花いけにせん二升樽　(奇　拔)
猫の妻へつゝいの崩れより通ひけり　(滑　稽)
山里は萬歳遲し梅の花　(蘊　雅)

鬼貫には、纖巧、華麗、蘊雅なる者など、殆んど見られない。あつても句の數が少い。其の他の諸體にあたるもないではないが甚だ少いのである。概していへば、自然眞率の一體に傾き、又芭蕉に比して、駄句、句屑が夥しいので、之は、無造作にいひすてた爲めである。その周匝なる俳論に比較すると、其の作品は、頗る遜色がある。いはゞ、議論倒れ

の感がないでもないが、談林の奇調、天下に横流する時に當り、夙にその弊の在るところを察し詞章彫琢の末技に拘々たるを非とし、卓然として、一家の見をたて、これだけの句を吐き得たるは確かに偉なりとせねばならぬ。

第三編　結　論

鬼貫は芭蕉と同じく貞享の頃より俳壇に現はれたる人である。來山と共に、談林派の殿將として、芭蕉が江戸に於て活躍したるに對し、主として、上方に於て獨特の俳風を鼓揚したのであるが、其の修業の逕路は、全く芭蕉に同じく、貞門より談林へ進んで行つたのである。而して、この二派の俳風に慊らず、其の流弊を厭うて、更に一新旗幟を立て、和歌より悟入して、幽玄清新なる一體を創めたが、其の理想とするところは、主として漢文學より悟入せる芭蕉と異なる點は無かつた。而して、其の俳論は、當代の俳諧の病弊に的中し、卓識明辯、一世を空しうすといふも不可なく、從つて其の俳風も、冲淡にして自然、其の間自ら一味の趣致を存し、斬然として頭角を現はして居る。併し、その半面には、平板にして無味なる駄作も多く、作句上に於ては、芭蕉とは、日を同じうして語ることは

出來ない。但、俗語を自在に驅使して一生面を拓き、後進のこれに追隨する者多く、又、その詩趣掬すべき佳什は、天明俳人の粉本となつて、天明の俳諧復興のよつて來るべき基を開いたのであつた。故に、その句は、往々にして、絶對的價値のさまで高からざる者ありと雖、その相對的價値に至つては、極めて大なる者があるのである。上、寛文延寶の俳弊を救ひ、下、安永天明の新調を興す。その偉蹟は俳諧史上特筆せらるべきものであると思ふ。（完）

第四編　餘　論

鬼貫の俳諧史上に於ける影響

鬼貫、晩年大阪に移るや、俳名頓に揚り、來山淡々等と雁行し、隱然一敵國の觀を爲してゐたのである。然るに、元文三年、鰻谷に歿してより、其の名杳として傳らず、伊丹風も亦隨つて聞ゆることなきに至つたといふのは、何が故であらうか。これには、種々の原因があらうと思ふ。第一は、彼の詩人的性質である。純な詩人肌の彼は、子弟を養成して門戸を張らうといふ考へがなかつた。强ひて門人を集めようとはせなかつたと見える。來る者は拒まず、去る者は追はずといふ、虛心怛懷なる態度であつた。逸士傳に出てゐる俳人で明かに、鬼貫の門人としてあるのは、數人に過ぎない。外のは、皆友人として交つたのであらう。從つて、その門人にも、高材逸足の士乏しく、師風を繼ぎ、之を中外に宣揚

するといふことが無かつた。第二には、彼は、芭蕉の如く、天下を周游するといふやうな長途の行脚を試みなかつた。越前や筑後に行つたことはあつても、それは、一蓑一笠、行雲流水の心やすき旅ではなかつたのである。山村野亭、心の趣くまゝに足を駐めて、張三李四の輩にでも、俳諧を說く芭蕉の行脚とは違つてゐたのである。故に芭蕉は、全國至るところに、門人を殘したので、それがみな、芭蕉の傘下に集まり、蕉門といふ尨大なる俳諧國を形成するに至つたのである。蕉門俳人の分布を見るに北は羽後より京阪地方へかけて、又その足跡及ばざる四國九州中國にも繁衍したのである。中には、芭蕉の門人など〻僞る者さへ、翁の歿後には出たやうである、許六曰、

翁滅後、門弟の中に挾る俳諧の賊あり。茶の湯、酒盛の一坐に如はり、流浪漂泊のとき一夜の頭陀をやすめたまふはたご屋など出て門弟のかずにつらならんとするあふれ者ども、猥に集作る。（贈落柿舍去來書）

かくの如くにして、芭蕉程の大人物が出なかつた爲め、群雄割據の狀を呈し、其角の洒落風、不角の化鳥風と漸次墮落し俗化し去つて、元祿俳壇の隆盛は、再び見るべからず。秋風落莫として、寔に孤城落日の觀があつたのである。然れども、物窮すれば則ち通ず。寛保、延享、寛延、寶曆、明和を經て、安永天明の復興時代に入るや、俗化の時代に孜々として俳想を錬れりし俳人が續々出で〻、暗澹たる俳諧の天地に、赫灼たる光明を投じたのである。即ち蓼太、曉臺、闌更、白雄、耒良、蕪村、太祇これである。これらの翹楚たる者は、太祇と蕪村である。他の四人は、この二人に追隨し、その後塵を拜したものにすぎぬのである。

太祇は、夙に、鬼貫の人となりを愛し、その句を蒐集して、鬼貫句選を編した。これは明和五年のことである。太祇序して曰、

（上略、既出）其聲玉に金に世に聞ゆる句そこばくと雖も、人の心に足らねばや猶求む、予も求めて見聞きに寫しけるが、漸かばかりにこそ侍れ。七車といふ家の集は世に顯れねばよしなしや。あはれそれをも傳へて、普く鬼貫の鬼たる無礙自在を見

もし學ひもせば、わが芭蕉翁に、此翁を東西に左右し、延寶より享保に至るこの道の盛世を照し見て、けふこの道にゆく人の心の花の匂ひに足り、心の花の影とゞきて、俳諧の幸ひ大いならむかし。しか思ふものから、自笑が乞にまかせ、これに序して與ふることになれり。

明和五年春二月

不夜庵　太祇

家集七車すらも見得ざる時代に、既に鬼貫の偉なる所以を知つて、之を尊崇するの篤きや、芭蕉翁に對して、西にこの鬼貫を配せんとまでいつて居るのである。句選は、その翌年正月に上梓せらるゝことになつた。友人蕪村、この時爲めに跋を作つて曰、

五子の風韻を知らざる者には、ともに俳諧を語るべからず。爰に五子といふものは、其角嵐雪素堂去來鬼貫なり。其角嵐雪おの〳〵其集あり。素堂は、もとより句少く、去來はおのづから句多きも、諸家の選にもるゝこと侍らず。ひとり鬼貫は大家にして、世に傳はる句稀なり。不夜庵太祇年頃此事を嘆きて、藻鹽草こゝかしこにかき集めて、數百句を得たり。譬はゞ、滄海に網して魚を求むるが如し。なほ洩れたるものは幾ばくか侍らん。さるを鬼貫句選と題して早く世の好士に傳へむと、例の氣みじかなる板元は、八文字屋自笑也。

于時明和己丑春正月　　三菓軒　蕪村書

五子の一人として鬼貫を擧げて、大家といひ、その風韻を知らぬ者は、俳諧を語るべからずとまで推賞して居るのである。また、其角、嵐雪、素堂に併せて、之を四老と稱し、俳諧における理想の人物と仰いで居つた。开は、明和六年より八年の後即ち安永六年に、門人春泥の句選の序文の中に出て居る。尤も、此は、夜半茗話に載せてあるのを引用したのであるから、實はそれ以前に成れる文なることは明かでなる。

（上略）或日又問ふ。いにしへより、俳諧の數家各〻門戸を分ち、風調を異にす。いづれの門よりしてか、其堂奥をうかゞはむや。答て曰、俳諧に門戸なし。只是俳諧門といふを以て門とす。又是畫論に曰、諸名家不二分レ門立レ戸、門戸自在二其中一。俳

諧又かくのごとし。諸流を盡して、これを一囊中に貯へ、みづから其よきものを撰び、用に隨て出す。唯自己の胸中いかんと顧るの外他の法なし。しかれども、常に其友を撰て、其人に交るにあらざれば、其鄉に至ることかたし。波問ふ。其友とするものは誰ぞや。答、其角を尋ね、嵐雪を訪ひ、素堂を倡ひ、鬼貫に伴ふ。日々此四老に會して、はつかに市城名利の域を離れ、林園に遊び、山水にうたげし、酒を酌で談笑し、句を得ることは、專ら不用意を貴ぶ。如此する事日々、或日又四老に會す幽賞雅懷はじめのごとし。眼を閉ぢて苦吟し、句を得て眼を開く。忽ち四老の所在を失す。しらずいづれのところに仙化し去るや。恍として一人自彳む。時に花香風に和し、月光水に浮ぶ。是子が俳諧の鄉なり。波微笑す云々

鬼貫に傾倒することの如何に深きかを知るに走る。句を得るに不用意を貴ぶとは、即ち鬼貫の理想としたところではないか。更に、これより後るゝこと六年、即ち天明三年には、俳諧なゝくるまが刊行せらるゝことゝなつた。大阪の書肆、高橋氏は、その祖父只川が鬼貫の門人なりし故を以て、七車の中より、向に梓行せる鬼貫句選に出でたる句を除き、句選には洩れたる句文をとつて、假に七車と名づけたのである。而して蘆屋なる人を介して、京の三宅嘯山に跋を乞うたのである。嘯山は、素より鬼貫の句を愛し、夙に鬼貫の名稱せられざるを嘆じて居つたのである。よつて之に跋して「千載知己の意を濟」したのである。嘯山の跋あるが爲めに、辛うじて鬼貫の略傳が分るといつていゝ位、この跋は重寶がられたものである。太祇、蕪村、嘯山は、鬼貫研究史上の恩人であつて、恰も、蕪村太祇が、子規の紹介によつて世に知らるゝに至つたと同じく、この三人が無かつたら、鬼貫の名も句も、亦隨つて湮滅に歸したかも知れぬ。

以下、少しく句の實際について、その影響如何を老へて見よう。太祇の句には、會話の語を挿入したものが多いが、鬼貫にも、その先蹤はある。が、鬼貫よりは更に自在の趣がある。そして、理窟を離れ、俗氣を脫し、嫌味のない、輕く淡き滑稽に富み、すら〳〵として、澁滯の跡なく、また艶麗なる句の少ないところも、鬼貫に甚だよく似て居る。而し

て、措辭の巧妙なる點は、鬼貫よりも、幾層倍もすぐれて居る。太祇のかいたものには、鬼貫に關する記述もあるであらうと想像せらるゝが、余は、太祇句選より外は、太祇に關するものは見たことがないから、何ともいへない。

蕪村が、下野の西川の清水で詠吟したる

柳ちり清水かれ石ところ〴〵

は、蕪村の三十歳頃に即延享頃の作であるが、之を當時一般の俗調に比載すれば、其の品格の高きこと驚くべきである。かくの如く、卓然として時流に挺でたる着眼、見識は、彼のいへる如く、全く、元祿の古調を準則とし、五子四老を軌範として、之に私淑し、雅趣詩趣を自得したるに依るものであると思ふ。蕪村の句に、

鬼貫や新酒の中の貧に處す

といふのもある。俗語を用ふることは鬼貫に似てゐるが猶、語調の類似してゐるのをあげると、

鶯が梅の小枝に糞をして　鬼貫
鶯のなくや小さき口あけて　蕪村

みどりたつ岸の姫松めでたさよ　鬼貫
躑躅咲いて石移したる嬉しさよ　蕪村

行く秋やむかしをからでふじひとり　鬼貫
木曾路ゆきていざとしよらむ秋ひとり　蕪村

花のない木による人ぞたゞならね　鬼貫
大文字や近江の空もたゞならね　蕪村
口切や小城下なからたゞならね　蕪村

雨ながら朔旦冬至たゞならね　召波
山うどに木賃の飯ぞわすられね　太祇

花散つて又靜なり園城寺　鬼貫
花ちつて木の間の寺となりにけり　蕪村

蕪村の門下に於ては、蕪村に倣つてゞあらうか、鬼貫に傾倒せる俳人を出した。それは几董である。几董は、鬼貫を光琳に比して、

畫に光琳あり俳諧に鬼貫あり

行く春や春のこゝろの置所　几董

鬼貫の

來いといふときには來いでおういおい

に擬して、

西行上人の意を追て鬼貫が口拍子に倣ふ
來たか來い見ずにおいてもちる花ぞ　几董

又、鬼貫の

おもしろさ急には見えぬ薄かな

溫古集には、上五が淋しさのとなつてゐるが、鬼貫五十年忌には、

淋しさの年々たかし花すゝき　几董

箕山紅葉餘興

富士といふ有馬の山や秋の空　星府
によつぽりと出るおにつらが月　几董
酒醸すことしの米をにほはせて　同

これは、几董の游子行に出て居る連句であるが、富士とは有馬富士のことで、無論鬼貫の、

によつぽりと秋の空なるふじの山

といふのから思ひついたのである。彼は、蕪村太祇の風格を摸するに力めて清麗な句を吐いたが、一方また俗語を多く用ゐて鬼貫の俳風に倣つてゐる。几董は、獨創の力には乏しかつたと見えて、文章、ことに擬古文などは、秋成の風に近い。

鶯よなにがこはうてにげ支度
ぬつくりとねてゐる猫や梅の股
野も山も冬のまゝじやに春の水
そゝかしきあるじがつぎ木覺束な
この風の夏は吹かいで落葉かな
二日みていかさまはなのよしの山
家主の罪にわせたるうこぎかな
咲きいでてあらせはしなの櫻かな
凧の尾の我家はなるゝうれしさよ

召波の

鬼貫もうたをよみけりもづおどし

は、禁足旅記の

田の中に棒の一本立たるは
鵙をおどすか千の字か　　鬼貫

に據つたものである。

大江丸の

によつぽりと僧こそみゆれけさの秋　（俳諧袋）

伊丹蜂房十三回に今の竹瓦樓はち友集の催しあり其の榎に笑みし句

によつぽりと秋の空なるふじの弟子　（同）

いづれも、鬼貫のによつぽりとの句に擬したのである。

祭り太鼓いかに鬼貫たしかにきけ　大江丸

などの句もある。鬼貫の

さくからにみるからに花のちるからに

對して、

かふからに脊負ふからに鼻のちるからに　桃助

といふ川柳も出來た。

要之、鬼貫は、その歿後約四十年、即ち天明の革新時代になつて認められたのであるが、蕪村の新調も、鬼貫等の句より自得した結果であるのであるから、天明調の母と稱しても溢美の言ではなからうと思ふ。

附　錄

附錄　大悟物狂

（題簽ニハ鬼貫集トアリ）

弔鸞動井序

予丙寅季夏始赴東武。爵友人鸞動于其鄉。送且謂曰、吾之所欲見者、惟富士山耳。雖數聞諸往來之客、言大而已。景象靡詳。請子記來及於我乎。遂別。初秋既卒。惡知永離。今玆秋七月歸于難波。遂至其塚上、愴然而嘆曰、難矣生也。將與誰語之但雖其人無、言猶在耳。我豈欺於死哉滌翰萩露、效於繫劍云。

嚮々哩居士　貫

富士の形は畫るにいさゝかかはる亘なしされ共腰を帶たる雲の今見しにはやかはりそのけしきもまた〳〵おなしからずして新なる不二をみる事其數暫時にいくばくそやあしたか山はをのれひとり立なは丼ひなからん外山の國に名あるはあれと古今景色のかはらぬこそあれ

によつほりと秋の空なる不二の山

夕くれにまた

馬はゆけと今朝の不二見る秋路哉

峯は八葉にひらきて不生不滅の雪を頂き吹ぬあらしの松の聲裾野になかぬ虫の音鸞動く是今たしかに聞け我石を撫て生れぬ先の父ぞ戀しき

此手向草はよとせむかしの秋にしほれぬそれが中に鸞末期に詠し松耳天地に久し我その木のもとに獨句を次でことし又不消の露をむかふ

百　韻

根は常盤しはし紅葉ぬ松の蔦
きのふもけふも露はしろけれ
あの雁の來る彌生は歸るらむ
かつらの落る夜の帆はしら
此石にゑぼしおかれし烏帽子石
古歌もつて出て公叉に勝ッ里
天地は梅に櫻の花もなし
つらゝは冬の音戻す水
朔日は十二あれども長閑なり
奥の山家に圍爐裏はくらん
この順にひころは見えし雪の松
人は船行ふねは人行
闇の夜も耳は月夜の郭公
逢ねと戀は心逢ひけり
世の中の中に預しなみたかな
誰ともなしにぬすむ獄門

今朝みれば案山子あふのく夜の雨
山より下をかへるつはくら
古郷にも我もいたゝく秋の月
顔の似ぬ子は請とらぬ妻
煩腦(マヨ)の花をわらへる墨衣
雲より空は降ぬはる雨
むさし野は霞にせはきむかふなる
寢て居る牛を色〳〵にみる
此冬もおしきはおなし命にて
氷のうへを渡る世の川
王城の人は手足の眞白なり
八瀨のつふりは今も催馬樂

出る日の入日になれば月出て
いつひかるへきしれぬ稲妻
秋の夜の方角わかて丸木橋
椎の枝折ル猿の音して
比丘尼所の文こそ京の涙なれ
着(チャク)せぬかほの鬼かはら見よ
きられては水に影なき杜若
今度はとこへ出ん鴉とり
かり駕に眠る旦那のおもたさよ
いつの間にはく此里の下踏
ほか〳〵と夏野の地藏ほけ立て
鎭守のあたりむはら咲けり

西國にあはれは勝し平家蟹
油單の中に松しまの砂
よは〳〵と老母の寂ぬ夜思ひ出
いつ迄猫の死を隱すべき
北裏の萱草ふとく夭姚に
あはてそふ身のすがた干す衣
我疲を當見る我ハ疲ぬうき
風にすほめて橋わたる傘
隣にはきのふの花にうつ鞍
子の植置し山吹の月
身はすくに兎ても島の畑すきて
はぢぬ余所目をつゝむ老驪

別れては獺としれとも若衣也
むく〳〵としてなさけなの世や
血を分て他人に家もゆづられず
心はながくのこる山門
茶の比は宇治見に寄し伊勢戻
手ぬくひしろく成春の水
蹠子腰にうくひす聞や朝日影
住持とふたり吾駕喰ヒつゝ
つら〳〵と眠るかことく死にけり
娘に午の時をとられし
鑄ルかねは物うち曇るけふの月
たたわ見て貰ふ隣の秋に

蟠螂ハ誰をあてとに鎌立て
言(モノイフ)われはなにがいふらむ
かそいろの夢の三とせは髭からす
しはし息つぐ亂國の里
堂塔のくさりも今は見崩して
長者物與う山崎の祖母
うかれめに都のうつけだまされな
情にもれし撫付の顏
盜み湯は夢なき夜半の山嵐
論(ムシク)にのらはおとせをなへし
實ル支繼子の稻はたんとにて
朝時(ヨ)まいりに殘る月かけ

灯の花おとろふるほの〳〵と
またあたたかに君かあとよき
借(カス)もはれ腹の立しも我おもひ
目のまふまても煙草吹けり
麥刈んわせる時分をかんかへて
帶跡はかりしろき裸身
この浦にゐしれぬ船の流れ寄り
點(カラ)頭(ダク)まては見せじ獄
かたきとりてやるそと谷の水呑マせ
辻堂ありておとこ產にき
我を是稽の下と名のる支
印地する日は酒あたへけり

此粽となり在所の眞菰にて
ふくむゆかりは親しらぬ戀
腰もとゝ琴てはなしをひく月に
きりたちのほる秋の夕くれ
露の野を迎にいづる寺の犬
草の中から鶉とひける
冥加ある命は歸る追手とも
むかしと違ふ今の神達
聞しらぬ人は墨繪の松の風
夢をは覺したまへ世の誹
我ガを以てあらそふ花は地獄也
白日青陽に海兄弟

また鸞動去てよりこのかたいひ捨たる發句もこゝにならへておなしく語りぬ

春の部

大朝むかし吹にし松の風
六日八日中に七日のなつなかな

軒の鶯　窓の鶯　薗の鶯　枝の鶯　谷の鶯

うくひすは山ほとゝぎす斗也
梅咲てそれより後は天王寺
山里や井戸のはたなる梅の花
樹の中に只青柳の尾長鳥
春の水所々に見ゆるかな
如月の始伊丹を起はなれて

曙や麥の葉末のはるの霜

水入て鉢にうけたる椿かな

空道和尚いかなるか是なんぢが俳眼ととはれしに即答

庭前に白く咲たるつはきかな

夕きり廟

此塚は柳なくてもあはれなり

白魚や目まてしら魚目は黑魚

から井戸へ飛そこなひし蛙かな

ひとり舟にて伏見へくたる夜

おほろ〳〵ともしひ見るや淀の橋

妙法華　尼崎本興寺奉納

去年も咲ことしも咲や櫻の木

さくら咲比鳥足二本馬四本

日和よし牛は野に寢て山櫻

うつろふや陽（ヒナタ）の花に陰の花

月なくて晝は霞むや昆陽の池

一鍬や折敷にのせし菫草

獺はおほろ烏のねさめかな

桃の木へ雀吐出す鬼かはら

旅　行

あふみにも立や湖水の朝霞

春風や三穗の松原清見寺

貞享四年の春

一の洲へ都の客と馬刀とりに

人に逃人になるるや雀の子

目前の興

春の日や庭にすゝめの砂あひて

彌生三十日の雨を

はる雨のけふはかり迎降にけり

夏の部

津の國の玉川しれず郭公

おなし雲井の郭公

ほととぎす耳摺拂ふ峠哉

鶯の聲なかりせは目白哉といへるを今ならは誠や

うぐひすや音を入て只青き鳥

心なくてまはるもおかし茶引草

野の末やかりぎ畑をいづる月

我が身のほそく成たや牡丹畑

ならにて

神々と春日茂りてつゝら山

非情にも毛深き枇杷の若葉哉

旅行の里

のり懸やたちはな匂ふ塀の内

つく〳〵とおもふ

我むかし踏つぶしたる蝸牛哉

卯月廿七日西吟へ行く

葉なりとも西吟櫻ふところに

おなしく

けふの日を嘸五月雨に思ひ出ん
夕暮は鰷の腹見る川瀨かな

卯月廿八日道聞といふ醫師の新宅にてほ句望まれしを

どの軒にあやめふくらん來月は
五月雨はただ降ものと覺へけり
さみたれにさながら渡る二王哉
みよし野の川上になり平の隱れたまひし所とてありけるに人の發句せよと望ければかのおとこのむかし杜若の例にならひてむはらの花といふ言葉を沓かふりに置て
むかしとへばは卵塔までの葉末哉
鳴せはし烏とりたる蟬の聲

端午

芦原や豐の粽の國津風
こひしらぬ女の粽不形なり
烏羽のほとり通りていひぬ
藪垣や卒途婆の間を飛螢
さはく〳〵とはちすをゆする池の龜
冬はまた夏かましじやと言にけり

龜之部

桐の葉はおちても下に廣がれり
破はせをやぶれぬ時も芭蕉哉
埜はなれや風に吹來る虫の聲
ゆがんだよ雨の後のをみなへし
露の玉いくつ持たるすゝきぞや

茫〳〵ととり亂たしたる薄かな

くたり舟にて

稲妻や淀の與三右か水車

おもひあまり繼る名を打碪哉

今はむかしの秋もなくて

伏見には町屋の裏に鳴鶉

貞享よつの秋長月十七日の夜更行まゝに庭のけしき人はしらす

今の心是こそ秋の秋の月

おなし夜ねられぬほとにこゝかしこをめぐりて

いとゞ鳴き猫の竈にねふるかな

不二の山ちいそうもなき月し哉

哥人はるながら入唐す

秋の月人の國まで光りけり

見ぬけれど月のためには外の濱

有岡のむかしをあはれに覺て

古城や茨ぐろなるきりぐ〳〵す

あゝ蕎麥ひとり茅屋の雨を臼にして

草の葉の岩に取あふ老母草かな

木にも似ず扨もちいさき榎の實哉

去程にうちひらきたる刈田かな

踏ては花を破り不踏して行道なし

野の花や月夜うらめし闇ならよかろ

宗因廟

今も此翁の道廣し長月の比その道をしたひ行く故つゝしみ言の葉を手向ぬ

宗因は春死なれしが秋の塚

冬之部

物すき(マヽ)やあらおもしろや歸り花

世の中を捨よ〳〵と捨させて跡から拾ふ坊主共かな

ふる寺に皮むく樓櫚の寒け也

おとなしき時雨を聞や高野山

在郷

種なすひ軒に見へつる夕かな

遠干潟沖はしら波鴨の聲

葉は散てふくら雀か木の枝に

元祿二

鬼貫の袴(マヽ)

おもふに花の比よりそのかたち凋み郭公の聲聞夜毎も懶聞さそなに

やありけん散かゝる紅葉の比ふる里を都に別れて立歸る秋をしらぬ

身のあはれさは早時うつり一生爰に盡て月も日も十に滿る夜嵐に鐵

卵去て來らず是何者そ我また是何ものそ空々寂々夢又夢それが中に

親しみにひかれてきのふけふとはおもはざりしをとおもふも是また

何事そや

いつもみる物とは違ふ冬の月

宇治にて

冬枯や平等院の庭の面

井のもとの草葉に重き氷柱哉

雪路哉薪に狸折りそへて

ふくと程鰒のやうなる物はなし

貞享四年霜月廿九日飯後の雪を

鰒喰て其後雪の降にけり

何故に長みしかある氷柱ぞや

かけはしに猿の折たる氷柱哉

旭影さすや氷柱の水車

水よりも氷の月はうるみけり

紙子着て見ぬ唐土の郭公

不二の雪我津の國の者なるが

雪で富士か不二にて雪か不盡の雪

寒苦

雪の降夜握ればあつき炭火哉

俳諧平外體

岩陰やけふは汐干の淡路山

京にのぼりて

水無月や伏見の川の水の面

宇治川や朝霧立てふし見山

枯芦や難波入江のさゝら波

雜

淀川にすかたおもたや水車

初瀨に旅ねして

小夜更て川音高きまくらかな

閨の夜も又おもしろや水の星

しよろ〳〵と常は流るゝ大井川

をとこ山にて

鑓かけに御池の魚の逃ぬ山　　鬼貫

山崎にて

木神(コダマ)せよ油しめ木の音斗　　才磨

須磨に此吾妻かたけやしほ衣　　來山

鹽尻は富士の様なる物ならん　　補天

又きさらさ十日をむかへて鐵卵をおもふ興行

うたてやな櫻を見れば咲にけり　　瓢界

月のおぼろは物たらぬ色　　西鶴

酒盛の跡も春なるゆふべにて

名に聞なれし浦の網主

五月雨に預て通るきみの駒

尙ヲ山ふかく訴狀書かへ

世の噂いはぬ草木ぞ恥しき　　萬海

親の住るにおなし白雪　　舟伴

餅つきに呼ぶ者共の極りて　　磨

常は橋なき野はつれの川　　貫

ほと〳〵と楮(カウゾ)たたゐて濁す水　　天

むなしくさけて歸る馨(モントリ)　　山

我宿の菊は心の節句なる　　鶴

こかるゝかたに三日月の端　　界

虫はなせそれも涙の夜物ぞや　　貫

とへども繼をしらぬ木法師　　海

鉈かりに行まい筈か近隣　　山

火に焚て見よちりの世の花　　磨

さひしさに喰てなくさむ土筆　界
瓔のまつりの魚を拾はむ　天
儒（モノシリ）といはれたる身のいそがしさ　海
常盤の松に養子尋る　鶴
根なし草根出來けるは豐にて　磨
いつも曇らぬ國そしりたき　貫
難義なる風の千島に住馴て　鶴
我女房にあふもうるさや　山
鼠尾草は涙に似たる花の色　天
哥書まよふ袖の碓（カラウス）　界
捕れ來て田舍の月も白けれと　貫
朔日南から膾せぬ家　海

黑餅を二つならへて簇印　山
秣をいるゝ賤に名のらせ　磨
人々をよき酒ふりにわらはして　界
金乞う夜半を春にいひ延　鶴
どれ見ても一構ある御公家達　海
戸渡る海へ舍利をなけいれ　天
雨ねがふ龍の都の例にて　鶴
人は火をけし火をともしけり　貫
けぢ〳〵に妹かくろ髪かし（マヽ）るるな　磨
戀ともいはす死果しよし　山
盆（マル）池や面を見せぬ藻のうき葉　天
けふも出かけに揃ふ小比丘尼　界

物いはて氣の毒の牛か角なるや　貫
築地くゝりし雪の足あと　海
おろかさは寒聲つかふ身の獨り　山
うらるゝ娘里の落月　鶴
憂中の名殘に汲ん秋の汐　界
雁に鷗に浦つくしまふ　磨
ほとけとは花見る内か佛也　海
二十日團子は丸き百日　天

和哥の道は我朝の法なり法は常也その常をしらは俳諧を知へし俳諧の夢覺なはまた常をしらんなれと我いまた此道の達人を見す世上皆風躰ににかゝはり或は一句を工みにし言葉をかさりて前句のなしみをもわきまへす或は懐紙の座所または正花をあらそひ我を立る輩是をのれに德なき故也德あれハ人夫を惡敷にをかす若我をもつて德を押時その我に遊つりて作る所の句の中に卷頂あるの意味をしらず只俳諧の味を喰ひ今日のたすかる事をゑずして得所皆病ひにや曰ク人と我と常いふ所の言葉十七十四にきれはこと〳〵く俳諧也其世界をしらば全體前句のなしみあるべし

發句も又目前の常を作らば意味深ふしてしかもにほひあらんその大道にいたらずしてかたちを似せは一句になどか色香を持ん善惡を知て姿風躰のよき所にとゞまるも是病なれば只可不可のふたつをもわするべしわするといふも又おなじ病也

ひとり立我俳諧を觀ずれば
　上手でもなし下手にてもなし

元祿三庚午五月日

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

附錄第二

祖翁鬼貫居士は年月遙に隔りぬればその面は知らざれども生涯の句々は文車にのこりて其高雅を慕ふ事暫らくも心頭をはなるゝ時なしされば懷書の常情にありて此夏比やかの骸骨の上を粧ふてと口すさみ結ひしにもとづき侍りて

青梅はその骸骨のみのり哉

はた取ありて彼家の支系余に傳り來しもひとかたならぬ因緣なればことし八月二日五十年遠忌弔ひ侍るに諸君を勞しやつがれが拙き言の葉をもかいそへて聊寸志を顯し其恩の淺からぬに報ゆるものならし

石臼に竈馬とまるもおもひなれ　机月

むかし予が祖父百歳の賀に

杵うたへ百を産聲玉椿　即翁居士

かゝに住作を給はりし遠きをしたふて

諷ひそへ佛の賀莚月の杵　伊丹雲郷

種ちりて秋のひかんの鬼茄　伊丹規甲

邯鄲の寢覺手向ん思草　伊丹蟬角

鬼貫は津國伊丹の產姓は平泉陸奥和泉三郎の裔也上島與三兵衛といひ又利左衛門と改む。貞享の比筑後の柳川侯に仕へ祿三百石を賜ふ元祿のはじめ骸骨を乞ふて鄉に歸り其の後亦和州郡山侯に同樣にて仕へしかど病を得て退去し京攝のあいだにあそび俳諧をもて世に鳴。鬼貫はまた佛兄と號す元文三年戊午秋八月二日歿す行年七十八歳。法名仙林即翁居士といふ。其子孫同州池尻村に住し今猶存す机月は其支流として即翁自書の系圖一卷を所持せり故有て今浪華に在よりて此擧ありといふ。

囉々哩居士五十年懷舊

こほれしを數珠に繫がん梅もどき　池田竹外

蓮の實や濁らぬ水の流汲む　左言

玉とまろふ言の葉月の二日哉　李岬

によつほりとひとり秋ふる佛哉　田福

權花翁の遠忌を行はるゝ机月のぬしに申贈る

流くむうれしさむせべことし酒　平安紫藤

蓮の實や皆禁足の佛達　雲水月溪

あるは鬼貫にはいかいの道を尋さびしさの急には見えぬ薄哉此句をもて此翁が風流に高階なるを知る也今歿後五十年にして世人いよ〳〵仰ぎて名家と賞す

さびしさのとし〳〵高し色すゝき　几董

天明七丁未秋八月二日

（大阪府池田町　稻東猛民藏）

補遺

本書公刊に際し、印刷校正も大分進んだ頃、大阪府下、箕面の仰箕村舍に、高橋桂溪翁を訪うた。同翁は、隱れたる俳諧史家であつて、今は、悠々風月を伴として居られるのである。夙に伊丹派の俳諧の研究に務められて、森無黄氏主宰の「初冠」に毎號執筆せられて居る。從來とても、樣々垂示に接して、蒙を啓いた所少くなかつた。殊に、この度、翁が奇二氏より借覽せられて、小生にも、一覽を許された原本及び寫しは、鬼貫の研究上に、非常な參考になつて、糢糊たる鬼貫の傳に、一道の光明を投じたるかの感がある。その「上島系圖」は、上島八郎兵衛の後系なる奇二治郎兵衛氏の所藏に係るもので、同氏は大阪府下三島郡春日村字奈良に居住せらるゝ舊家である。本姓は西村氏。田中桐江門西村西濤翁の後である。同氏の實弟に當らるゝ上島兼四郎氏は、伊丹より分家せられたので、上島宗春を祖とする。現在同家には、古文書は殘つてはゐないが、大廣寺山門は、その一建立であるといふ。今「上島系圖」によつて、その家系を調べてみる。

一、系　傳

「上島系圖」の重要なる部分丈けを書き拔いてみると、左の如くである。

- ○○天兒屋命……秀衡
  - 忠衡
    - 泉三郎 経治
      - 嶋新太郎 経秀
    - 尚起（タカヲキ）
      - ○○経直
        - 上嶋 直定
          - 下嶋 次郎 起成（ナホムネ）
        - 嶋孫太郎 直綱
          - 上嶋太郎 直重
            - 上嶋彦太郎
- 直基
  - 上嶋四郎 直衡
    - 上嶋彌四郎 公基
      - 上嶋新四郎 直久
        - 上嶋藤次 宗基
          - 法名宗溫
        - 上嶋總三郎
- 宗茂
  - 上嶋總兵衛 茂勝
    - 上嶋二郎兵衛 茂久
      - 上嶋平兵衛
    - 住西宮
  - 法名宗茂 住攝州西宮 嶋太郎衛門
- 重種 住攝州伊丹

- 直宗（ナホムネ） 上嶋九郎兵衛
  - 法名宗府 文祿年中自塚口移住伊丹村
  - 宗樹
    - 住平安城
    - 壽軒 住平安城
    - 島太郎兵衛 住平安城
  - 宗次 住伊丹上嶋清兵衛 元祿四辛未年八月八日死去 宗春 年八十八 法名邦外
- 方房（マサフサ） 早世 法名紅影
- 方副（マサスケ） 上嶋喜右衛門 元祿六癸酉年八月廿三日死去 法名月溪宗秋
  - 宗共 上嶋勝右衛門
  - 女子
- 宗邇（ムネチカ） 上嶋與總兵衛 始藤九郎次半藏 次源五右衛門
  - 童名永太郎 寛文元辛丑年四月四日辰上刻生 伊丹貞享四丁卯年夏五月廿一日仕筑州三池立花主膳正藤原種明

- 女子　臣賜三十人扶持祿元祿二己巳年九月廿七日乞骸骨去、同四年辛未年夏六月五日仕和州郡山城主本多下野守藤原忠平朝臣賜三十人扶持祿同七申戊年冬十一月十九日賜知行二百石同八乙亥年春正月十九日有故乞骸骨去又住郷伊丹支見自款
- 女子

定時　寛文丙午年十一月九日死去法名一屋宗榮

重治　住伊丹　上嶋八郎兵衛

宏純　住伊丹　上嶋勘兵衛

高重

基好　住伊丹　上嶋勘兵衛　寛文八戊申五月十九日死去法名宗敎

定永　上嶋次左衛門　元祿二己巳年七月十四日死去法名宗齊　住攝州川邊郡清水村

- 永利　上嶋平左衛門　住攝州天滿
- 永義　上嶋彦兵衛　住清水　元祿三庚午年四月十六日死去法名源長
- 女子

直嘉　住伊丹　上嶋九郎兵衛　元祿六癸酉年七月十二日死去法名宗久

- 嘉利　住伊丹上嶋彌市右衛門　元祿三庚午年正月十八日死去法名宗悅
  - 嘉英　住伊丹　上嶋九郎兵衛　寛嘉利子
    - 利則
    - 嘉普
  - 女子
- 邇春（〇其冠？）　上嶋彦九郎

孝敎　住伊丹　上嶋勘兵衛　始曰安右衛門　元祿十二己卯五月廿八日死去法名常清

- 鶴松　早世
- 治房　上嶋勘四郎（〇青人）
  - 治常　上島勘四郎　（〇德七）享保五年庚子三月廿二日死去法名常鑑
  - 房英　上島勘四郎　（〇桃足）元曰安右衛門
    - 清房　上島五右衛門　（〇耳廣）
  - 住伊丹上嶋勘九郎
- 孝春（〇鐵朔）　元祿二年己巳十月十日法名常仙

この系圖の中、最後に現れてゐるのは、高重である。併し、それには、死去の年代が記してない。從つてこの系圖の最後の年代が、はつきりしない。が、假に一世三十年と見て高重の曾祖父定時の歿年即ち寛文六年より、九十年を下つた年代を數へて見ると、寶曆年間に當る。左樣してみると、この系圖は、鬼貫の歿後、二十餘年の頃に書かれたものだといふことになる。充分、信賴するに足るものである。「机月は其支流として即翁自書の系圖一卷を所持せり」（五十年懷舊）といつてあるのは、即ちこれであらうかと思はれる。之に

よれば、本姓は平泉氏であるが、經治より、島氏となり、南北朝時代には、南朝に仕へ、兄直定及び弟起成共に武者所に候した爲、兄は上島瀧口、弟は下島瀧口といつて、區別するこになつた。上島といふのは、その所領であつて、現今、大府北河内都上の島の地がそれである。故に、上島は、ウヘジマでなくて、カミジマとよむべきである。

それ以來、代々南朝に仕へて、精忠を盡したのであるが、文明元年、南朝退轉の後は、直衡は、伊勢に下り、伊勢の國司北畠氏に賴つたのである。その子公基は、伊勢の國司に仕へてゐたが、天文六年八月十二日、北畠家の家臣村田某と口論の果、之を討て、河内の石川に隱れ、翌年攝州御園塚口村に移つた。上島家が、この地方と因緣を生ずるに至つたのは、これが元である。そして、その一族は、大抵この邊に定住することになつた。鬼貫の家は宗基の三男直宗から出たのであるが、鬼貫の曾祖父たる直宗は文祿年間に、塚口から伊丹に移住したものである、但上島家過去帳には、春翁宗府信士の條に、寛永六年己巳五月二十二日自塚口村伊丹郷へ移とあるさうである。（桂溪翁談）

系圖によると鬼貫の父は、元祿四年に八十八歳で歿して居る。句選に、

何おもふ八十八の親持つて

とあるのは、今にして思へば、この父親の事だつたのである。さうすると。父の歿したのは、天阪在住中の事になる。かういふ家柄であるとすると、鬼貫が、召出されて、三十人扶持を賜ふなどいふことも首肯することが出來るやうに思ふ。

系圖に邇春とあるのは、逸士傳の所謂其冠であらう。

二、住居、祿仕、

机月の説では、貞享の初年に、柳川侯に仕へたとあるが、系圖では貞享四年五月廿一日出仕となつてゐる。實は、之に從ふ方が、辻褄があふやうである。貞享三年の夏から、四年の春にかけては、大阪に在住してゐた證據は、あの年表に揭げておいた句が、それなのである。貞享の初年に、柳川に仕へたとすると、貞享三年の東武行や、貞享四年の春の句

なども、柳川在住中のことゝなつて、大變困つたことになるのである。四年の夏から柳川へ行つたとすると、よく疏通するのである。

次に、元祿二年九月廿七日致仕まで、在任約二年餘、それから歸りついたのは、大阪である。

大阪で、最初住んだところは、老松町らしい。瓠界の難波巡禮に次の如く出て居る。

昨日かも紙鳶見て泣にけり

老母のいふ鳩に三枝の禮鴉に百日の恩亡孫長ならば我めでたく死ンものをと佐

與姫におなじひれふる袖を返し西國に旅立事を願ふ其日數をつもれば別るゝに

久し道の程無覺束をなけきて一向とむるに得心ある後日(ヒ)あればとて願を捨れば

不孝幸我誹友を運て子の追善老母のねがひのために

難波順禮

十日　騏驥駸驪は一日に千里を駈ス吾は一日に一里を行ク鳩鯤おのれ〳〵の樂ミ笠油單杖此三色を旅行の運として天滿に行き亡子が墓に花を立水を手向夫より老松町に出ル後は寺々の鐘の音麥の若葉も君が代と詠てその角の亭に案內

一番

喰(クラ)おいきや喰いかしませ五加食　馬樂童

長閑なるかかな老松の亭　界

小坊主が袖なし羽織春めきて　同

くま鷹部屋に風や吹らん　樂

月影にとうらん作ル觀世捻(ヨリ)　同

唐辛こそ唐からしなれ　界

鬼貫の家は、老松町の角にあつたと見える。難波炬燵にも、馬樂童と出てゐるさうであるが、普通は、堂とかくのに、珍しいことである。

後、元祿五年堀川に住んだことがあるが(高すなご集序)、予は、最初、京都の堀川との

み思ひつめてゐたのであるが、桂溪翁の御話に、天滿にも堀川といふふところがあつて、そこは、多く酒造家の居るところであるといふ。その話を聞いて、余は、大に發明するところがあつた。即ち、鬼貫の堀川といへるは、京都のそれでなくて、大阪の堀川なのである。系圖をみても、永利などは矢張天滿に住んでゐる。してみると鬼貫が天滿の方にすんだのも、偶然でない。深い因緣があるのである。唯、困ることは、系圖では、元祿四年夏から、八年の春まで、郡山に仕へたとあるので、その間の元祿五年に「堀川の馬樂堂書しぬ」とあるのが、解しかねるが、これは、系圖の方が、誤であつて、元祿五年夏からでも、郡山へ行つたといふのがほんとうではなからうか。

笠とりて跡ちかゝなや春の雨

は、郡山を退く時の吟であるといふが、系圖では、春に骸骨を乞うたとあつて、季が一致してゐる。

元祿八年致仕後の動靜は、詳かでないが、系圖では、一旦歸鄕したやうに見える。そして、元祿十六年に至つて始めて京都在住の句が見え出して來てゐるから、その頃から、京に移つたものと見える。それから、いつ頃まで京都にゐたかといふことは、文献には、微すべきものが少いが、俳諧袋によると、享保初年の頃には、大阪にいつてゐたと思はれる。それは、既に說いたことであるから、再び贅せぬ。

予が、從來考へてゐたところと、この系圖とを、綜合してみると、次の如くになる。

一、寛文元年から貞享初年の頃まで即ち出生より二十四五歲まで……伊丹在住の時代（二十四五年間）。

二、貞享四年から元祿二年まで即ち二十七歲から二十九歲まで……柳川侯に仕へた時代。（約二年間）。

柳川を退いてからは、一旦故鄕に歸つてゐたらしく、机月のいはゆる「元祿のはじめ骸骨を乞ふて鄕に歸り」といふことになつたらしい。

三、元祿三年から五年（?）まで即ち三十歲から三十二歲までは……大阪に在住の時

代。(約二年間)

四、 元祿五年(?)夏から同八年正月まで即三十三歳から三十五歳まで……郡山在任の時代。。

五、 元祿八年から十四年まで即ち三十五歳から四十一歳まで……不明の時代。(約七年間)。

思ふに、大野の城主に仕へたのは、この七年の間のある數年であつたらう。大野の城主に仕へたことは、鬼貫の自ら記してゐることであるのに、机月も傳へて居らず、系圖にも出てゐないといふのは、怪むべきことである。

六、 元祿十五年頃から正德の末年頃まで即ち四十二歳頃から五十五歳頃まで……京都在住の時代。(約十年間)。

七、 享保元年頃より元文三年まで即ち五十六歳頃より七十八歳まで……大阪在住の時代。(約十年間)。

詳細にいへば、多少の出入はあらうが、大體の見當は、この位のところで、間違はあるまいと思ふ。

京都在住の時代は、割に長いが、これも何のゆかりがあつて京都にすんだのか、分らなかつたのであるけれどもこの系圖によつてみると、鬼貫の大伯父を始め、敎人も、既に京都に住んでゐる。それらの人を賴つて、京都にいつたものゝ多くである。

三百石を以て抱へられたなどいふ點は、疑つてみれば、多少誇張したところがあるやうにも思へるが、併し、前に揭げた具足餅や具足櫃の句があるのを見ると、かの馬琴のいへるが如く、足輕などの如き賤卒をつとめてをつたのでないことは明かである。因に云、奇二家には、以前に緋縅冑を傳へてあつたといふ。今はないさうである。系圖といへば、どこの系圖でも、誇張したり、粉飾を加へたりした迹は、ありがちのことであるけれども、それは主として祿高とか出自とかについてである。鬼貫の柳川侯への出仕の年月日などが明記せられてゐるのは、これは、充分信賴するに足ると思ふ。そんな年時などは、別に矯

飾を加ふべき必要のない事柄であるから。

三、上島と墨染寺との關係

上島家が、南朝に奉仕した家柄であることは、系圖によつて明かであるが、南北朝合一後、上島家は、伏見深草にも住して、道元禪師の行風を慕ひ、伊丹へうつる時、道元禪師の墨染庵を、伊丹に移した。即ち、現今の墨染寺が、それであるといふ。山號を花嶽山といふは、花嶽常盛居士に由來すといふ。この人は、俗名油屋三郎兵衛といつて、天正十三年二月廿二日になくなつてゐる。その子は、心月常漚居士である。(寛永五年五月九日亡)常漚の孫、妙大常普居士(元文五年五月九日亡)即ち青人、併せて、この三人を開基の三人といつてゐるさうである。(この項市橋駒次郎翁談)

四、鬼貫の家

伊丹の本町、今の伊丹酒造株式會社のあるところが、油屋三郎兵衛の屋敷の跡である。こゝが、鬼貫の出生の所で、銘酒三文字の家である。總じて、この本町は、昔からのまゝの酒造家が、甍を連ねて、軒は深く、壁は白く、柱といひ、格子といひ、大きな材木を、惜氣もなく使つてあつて、かつしりした家々のたゝずまひ、見るからに、古い城下町らしい、落ちついた感じを與へる。因に云、家傳では、鬼ツラは、鬼面ともかくさうである。それが尤もであると思ふ、鬼貫では分りかねる。

五、宗旦の句

宗旦の句といふものは、僅に二三句より見たことはなかつたのであるが、先頃、洒竹文庫で、野梅集をよむの機會を得て、始めて十數句を見た。此は、鸞動の追善集で、貞享四年の秋の刊行である。宗旦の序文がある。

うたかたのあはれは、古澤の鸞動にや、見ぬ誹を好で、いづれの比よりか、みづか

ら野梅と題して、此あつめをよびしかど、いにしとらの秋身にいたつきの入て、今はの風を世に嘯て、そのことばに

根は常盤しばし紅葉ぬ松の蔦

よはひは、指をかゞむる、二返しのふたつ。おしむにもたらず、又惜むにもたらずて、心さしを捨かたく、滿ぬ句をたゞちにちりばむ。

也雲軒依梠子稿

とある。宗旦の句を、拾つてみると、

挿さむ花を予句の驕り哉

よしや散れ角に花咲春日山

筆の關片木の戸ざしや花盛

卯の花や鎚を待夕凋

諷の章蚤のさへづる夕哉

朝に咲顔に凋める垣根かな

蟻卷や昔しをぬける玉蒲萄

留主寺や霜にあづけて鐘の聲

鰤來り我に知する齡かな

かたばちは其さま賤し花の陰

獅々子鬱動はふりしてのゆふべ無關知常とあるためしるしの松をけづりて墨すそれかこころをいたみて

風前のなごり今半の燈炉哉

猶、「ほくきれ〳〵」にも出てゐる。

あいさつ

角落す小鹿の杖のすがたかな　攝州伊丹　宗丹

又、俳諧生駒堂にも、一句ある。

艮の山をかくせる霞かな

概して言へば、古風でもなく、又談林風をも脱して、眞摯なる敍景句に富み、淡雅なる趣致を含んでゐる。ことさらに、滑稽を弄せんとするが如きところは見えない。蕉風開眼の翌年、伊丹派に於ても、かやうな佳什を吐きつゝあつたのである。花見車に曰、

伊丹宗旦禪定尼舟殿の引舟なりしが請出されていかんして所がよさにはんじやうにてしなんした風俗を所にきわめられてかくれもなき名をとられしそののち鬼殿の引て出さんしたがいまだ風俗もしれず。

經しらぬ人も覺ゆる涅槃哉

序ながら、野梅集に出てゐる鸞動の句を見るに、

鸞　動

暮折に春の名殘や小松ばら
干潟滿て松のあらしを艤（フナニシリ）
山寺松埋めり木魚麓の呼子鳥
いつの代の又の御製や苅穂麥
我黑く心を花の蚊遣かな
我は小弓の手すさみを手向ルに
鳴橋となり我矢を渡す今霄哉
羅紗貧しく蓑富雪の朝哉
雪中の郭公
心郭公雪の樗を樵木神
齒朶を賣鯛を買て山人歸事遲し
假寢啄蠅や此世のあた鳥
女郎花立り旅僧指斷（キル）村薄
擇れて毛虫憂世の嵯峨野哉

六、鬼貫の句

鬼貫の句を、諸書より拾つてみる。

殘る火燵まだ山里はこたつかな　（貞享四年野梅集）

同四日曉

波の底にわが足形のあるやらん（○この句の次に左の如で出てゐる）

貫曉夢迷于蚌蛤鬱又耳漕於松風

（干瀉滿て松のあらしを艨（鬱動）

鷄が塒も菖蒲葺にけり

寒苦鳥の聲に脈みる山路哉

空井戸ほ西瓜に逢ず月のみか

雪路哉薪に狸折添て

角菱の餅にありとも桃の花　（元祿十五年花の雪）　大阪　鬼貫

雨たれや曉かたに歸雁　（元祿十四年俳諧ふたつもの）　佛兄

鶯や梅子とまるはむかしから

音羽山にて

瀧の糸は何のかもなし夏ころも

ことしの春子をうしなひて

この秋は膝に子のない月見哉

旅泊

つめたさに火を吹おこす大火入

艸の花水にまかせて根をひかへ　（寶永五年萱野草）　上島氏　鬼貫

五年ぶりにて

六月や風にふかれに古さとへ　（寶永六年なし草）　鬼貫

極月のはつか過てのしまつかな

郭公と號て文臺にうら書したるよし

ほとゝぎすようしみこんだ鳴こんだ（元祿十五年三河小町）　鬼貫

獨坐幽篁裏　深林人不知

彈琴獨長嘯　明月來相照

月ひと夜ひかし半分片むかし（享保二十年祇空句選）　伊丹　鬼貫

難波よりのたよりに申來されける

洒竹文庫所藏の書であるが、題簽剝落して、書名も明かでないが、祇空の句集で、祇空享保十八年四月廿三日歿などと、書入れがしてある。祇空句選とは、かりに余が名づけておいたものにすぎない。祇空と親交のあつたこともこれでよく分る。

次に、桂溪翁の來示によると、子葉の、「二つの竹」に、

一日は鬼貫にとめられて

かく山を引つたてゝ咲くしをに哉　子葉

月はなし雨にて萩はしほれたり　鬼貫

赤穗義士大高源吾と風交のあつたことがよく分る。尙、桑岡集にもあるといふが未見。因に云、前に擧げた萱野艸といふのは、義士萱野三平父子の句が、數章出て居り、西吟の序文もある。桂溪翁が、飜刻せらるゝ由。

七、鬼貫の娘の有無

系圖に鬼貫の娘のことは出てゐない。これも無いといふのが正しからう。「中秋十七日女のみまかりけるを」といふ詞書のある句は、果してこの女といふのが、自分の娘であるかどうか分りはしない。もし果して娘があつて、それが死んだとすれば、永太郎や父母の死の際に彼が句や文を草したと同樣にもと外に追悼哀惜の篇什をものしさうなものである。然るに、それらしいものが一つもないのを見れば、娘のないといふのが正しいやうに思ふ。

娘が無かつたとすれば、之を賣らうとしたといふ說は、固より成立たぬ。而して、娘を賣る程に窮迫してゐたといふ說は、亦成立たぬことになる。頭陀物語などの說は、益々怪しいものになつてくる。大體、鬼貫の窮迫說なるものが、いゝ加減なものである。

（大正十五年十二月二日夜）

鬼貫の研究　終

大正十五年十二月十八日印刷
大正十五年十二月二十日發行

俳人鬼貫の研究
定價三圓五拾錢

著者　鈴木重雅

發行者　東京市神田區錦町三丁目十八番地　南條初五郎

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十八番地　白井赫太郎

印刷所　興本精製　東京市神田區錦町三丁目十八番地　渋谷印刷

發行所　東京市神田區駿河臺西紅梅町十三　共立社　電話神田二三九二番　振替東京四六〇七四番